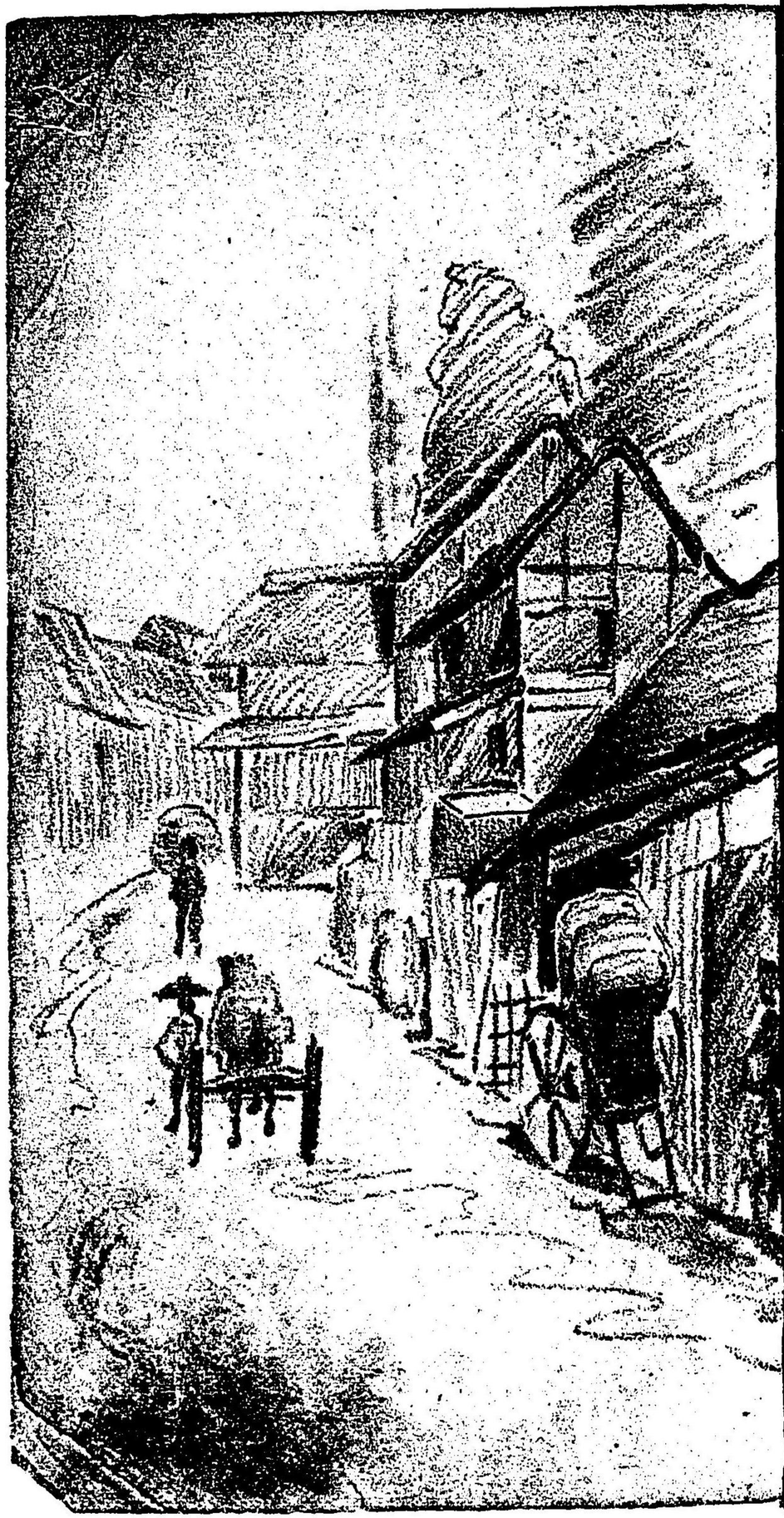
76-305

鉛筆水彩寫生画法

鉛筆水彩寫生畫法目次

總論……一
畫法畧說……六
鉛筆畫に要する器具……六
影と日向……二九
植物……三九
樹木……五〇
木の葉の種類……六〇
遠近法……六八
彩畫法……七〇



目次

實景寫生……七一
位置と結構……七六
陰陽の方則……八八
水彩畫法……九五
透視畫法……一二三

寫生畫法

岡田三郎助 校閲
大槻鹿輔 共著
落合浪雄 共著

總論

描畫の技術は到底注入的に教授され得可きものではないのである。尚更是を文字の上で諸君に了解の出來る迄説明し樣とするのは頗る困難な仕事である。けれども鉛筆の持ち方。線の引き方。繪の具の用ゐ方等の大躰の方則は述べられない事はないと信ずるので今此小冊子の内に出來る丈明瞭に。然も簡單に描畫の大樣を説明し盡そうと試みるのである。讀者は是を讀みながら必ず筆を取り又は實物に付いて了解の出來る迄研

究せられん事を希望するのである。

描畫の技術は先づ是を分つて三とする事が出來る、即ち手先の練習、眼識の熟達、頭腦の鍛練て

第一。手先の練習が最も肝要なるものである。何故なれば此技術に依つてこそ。他人に印象を與へる事が出來るのである。若此點に不注意で疎にしたならば。出來上つた作品は最虛弱に。不自然な物である筈です。併ながら此方に於て充分の注意を加へて自然に近寄る方針を取つたなら出來上つた繪畫は必ず自由で。確固として、其上見る人を動す事の出來る力を備へるのでありましょう。尙今一言云はなければならぬのは、如何なる方法に依つて研究するにしても。先づ此の手先の練習が第一に必要である。其爲めに折角腦裏に湧き出てた妙案や。結構を筆に移して是を形に現はす事の出來ない樣な事では、頓と役には立たないのである。

第二。眼識の熟達は繪畫の結構、陰陽、色彩等の適否、巧拙を判定する事の出來る位に發達させなければならないのである。結構に於ては地平線は如何に斜線、重直線は如何。直線、曲線の配置に就いての凡ての智識を會得せねばならぬ。陰陽に於て又色彩に於ては種々なる色の配合又は濃淡の度合。其他の智識を要するのである。

第三。頭腦の鍛練は最も大なる目的を持つものである。併しながら初學の時分には唯種々習ひ覺えた技術又は智識を取纏めて、一幅の畫圖を造る樣にするのである。例へば木を描かんとする時に。幹、枝、葉の特種の描法を綜合し。如何にして是は配列し。透視畫法と陰陽の規則に依らしめんかを定める事、即ち繪畫全躰に就ての總て締め括りをするのが頭腦の如何に鍛練せられてあるかに依つて違が出來て來るのである。茲に必要な事は是等の三の區別は成る可く劃然と爲て置かなければならない事

て。何故ならば一つの研究の中に纏めて同じ樣に此三つを研究仕樣とすれば、其進歩發達は如何しても遲く、又少くなければならないからである。今田舍の粗末なる小屋を滿足に寫し出そうとするには、其を描き出すに足りる丈の手先の熟練が必要であると同時と。透視畫法の規則に依つて種々の物の、即ち家、立木、物躰、の位置割合を正當に定め。其上尙全幅に對して結構配合其他に要する頭腦の鍛練が必要となつて來るものである。若假に此一つを苟且に附したならば、假令其他のものが如何に好くあらうとも、一つの爲めに害されて、見るに堪えぬ惡作となつて仕舞ふのである。運筆の法が不手際であつたならば繪は弱い。汚い。不愉快なものとなり。眼識の分別が無かつた時には調子、躰裁が全く過まられ又崩されて仕舞ふ。尙又頭腦の鍛練が足らない時には、其繪は描法が如何に立派で調子も躰裁も整つて居るとしても、必ず死だ機械的のものゝ外は出來上り

はしないのである。

是等の條項は、繪を學ぶに最も正當な方法を指示して居るばかりでなく、又必ず利益ある結果を與へる筈のものである、一寸見れば初學の人達には、是等の法則が何の利益をも與へない樣に思はれるのは無理もない事で。初學の人は先づ出來る丈注意して稽古すれば好いのである。此の注意と云ふ事がやがて。前述の三節の條項に分れて行く樣になる筈のものである。

尙茲に初學の人に特に注意しなければならんのは、畫學は寫すのので濟むものではないと云ふ事である。多くの人は唯もう何か手本とした者を寫す事しか出來ないで。一寸したつまらない物でも寫生となると少しも筆が着けられない樣である。假令畫學は手先で出來るものとしても、全く一つの學問である、故に手先だけでは完全のものとは云へないのである。充分

に總ての事を會得して仕舞はなければならないのである。手先丈けが動いて、頭腦に會得する事が出來ない處からして、手本を見れば巧に描けて。手本なしでは一向に筆が動かないと云ふ事になるのです。既に一通り腕も出來、頭腦も眼識も發達した後には、大家の作品などを見れば。單に見た丈けで、非常に多くの教訓を受ける事が出來るのである。即ち其作品に依つて其畫家が苦心し研究した結果を知る事が出來、同時に應用する事が出來るからである。

畫法略說

一。鉛筆畫に必要なる器具（鉛筆畫に用ふる鉛筆は硬軟に依つて幾種にも別けられてある。H は硬い事を示し B は軟いと云ふ印である。BB は又軟く以上字を增す毎に

其度を强めるのである。

二。普通に使ふには HB、と B、BB、との三通りで澤山である。H は明るい處を描くに用ゐ。B は前景を。BB は所々の最も强い處へ用ゐられるのである。

三。紙は寧ろ柔い。滑かな。光澤のないものが適當である。堅い光澤のある紙は鉛筆を自由に受けない。時には思ふ樣に動かず、却て鉛筆が滑つて、要りも仕ない黑線を描いて紙を汚して仕舞ふ事もある。

四。畫板は頗る必要であるけれども、是非無ければならぬと云ふものでない。平な。滑かなものであつたらば、机の上でも、本の表紙でも、差支へは無いのである。畫板は質の細い滑かな木さえあれば、雜作なく作られるのである。大さは限りのない事であるが、先づ普通に用ゐられるものとして、二尺二三寸に一尺七八寸位の處ば手頃であらうと思ひます。

五。紙は畫板に確り付けられねばならぬのである。常に紙は卷いて保存する習慣であると、紙は如何も畫板の上で卷くれて始末に行かないものであるから、可成は紙も平にして仕舞つて置く方が好いのである。畫板へ紙を付けるには。畫學用のピンで紙の四方を止めさえすれば好いのである。

六。小刀は鉛筆を削るばかりでなく。畫が出來て後。光線を強めるとか墨色を白く拔くと云ふ樣な必要の場合に、畫面を削るに用ゐられるのである。護謨も時には必要がある。併ながら護謨は鉛筆を汚し。暗い處などでは紙の面をも傷けて仕舞ふ事がある、で成る可くは用ゐないのが得策である。けれども若如何しても用ゐなければならぬと云ふ樣な場合には、最初食麵包で擦すつて、少しく鉛筆の消された後を、護謨で擦する事にすれば大した過は出來ないのである。

七。鉛筆の持ち方は人に依り、又畫く場合に依つて、少しづゝの違はあるが。

先普通は中指と拇指で鉛筆を抑へ、食指で上から是を抑へるのである。此持ち方に依れば、右から左へ線を牽く事も出來るし。如何なる使ひ方をしても、左程の拘束は受けずに濟むのである。

八。紙は畫者の前に正直に置かれ。畫者は其躰を正しく整へ、頭丈を僅に前へ屈める。是は餘りに目が畫面に近付けば紛全躰の圖取り、又は割合其他を謬る虞があるからである。

九。初めは直線を引く事の稽古をするのである。夫れも極最初は上から下へ。次に下から上へと垂直線を畫き。夫から水平線を學び。次に右から左。左から右へ斜線を引く事を學ぶのである。て斜線を描く時には必ず四十五度の角度を過らぬ樣に、注意する事が必要である、何となれば。四十五度の斜線を充分目に了會させて置く時は、其以上又以下の角度が必要の時に、必ず目分量で以て見計ふ事が出來るからである。同時に地平線。

水平線を書く時も、充分注意して筆を取れば。時に依つて正しい水平てない場合に、容易に見分ける事が出來るからてある。

一〇。最初の稽古は、實に馬鹿らしい程下らないものではあるが。次々の研究の上に少からず根底となり。影響をするものであるから、充分其考へて面白くなくとも練習を仕なければならぬのである。

一一。例へば直線を引く事を習ふが如き、頗る雜作もなく又面白くもなく見えるけれども。初の内は決して是とても思ふ樣にはいかぬのである。筆は滑べつて思ひ通り運びの付かぬ上に。要もない處に筆が走り易いのてある、けれども。此困難は少しの間の練習て容易く出來上るのである。例へば一本の直線を引くにしても、手先の働きのみては出來得可きものてはない。目の働きが頗る重要なるものてある。てやさし過ぎるとしても、つまらないとしても。此等の練習は凡ての根底とするものてあるから、疏に

は出來ないばかりでなく。是が充分成功する迄は、是以外に何ものでも描く事は出來ないのてある。

一二。線を書くには、一端から一端まて、猶豫なく續けて描かねばならぬ。短い線を寄せ集めたのては面白くないのてある。短い線ならば手先て描く事が出來るが。長い線では臂から動して作らねばならぬのてある。初の場合に於ては指先の働きて。次の場合には腕の働きてある。

一三。目を馴す爲には。眞直な線を描く事の外。長さを定めて熟練させる事がある。水平線ても斜線ても、同じ長さて色々に線を引く事を研究するのが一つの手段てある。是をするには書始める處と、終りの處とに點を打つて置いて。其點から點へ筆を運ばせるのが、最初の稽古の手段てある。

一四。最一つ必要なる經驗は、自分て描いた線を幾つにも區分して見る事てある。最初は二つに分け。次に四つに分け。或は半分にして見。五分

して見る事が、目の熟練を増すには頗る好い方法である。

一五。此の練習の出來た時には、定まつた規則的の形を畫く事に移り。四角形から始めるのである。先づ一邊の長さを二つの點で定めて置いて。其上に他の二點を適當の角度を量つて畫き、其四點を透して線を描き、四角形を作るのである。

一六。次には長方形。長い方の二線と。短い方の二線とは、同じである可き長方形を畫くのである。是は始め適宜の四角形を書いて置いて、其下に左右とも兩方同じ距離に又二點を打ち。而して線を引けば出來上るのである。

一七。其次の課目は、正三角形を、如何にして作る可きかである。云ふ迄もなく、正三角形とは三邊孰れも同じ長さを保つて居る形ちを云ふのである。是は始め底邊となる可き二點を適宜の距離を置いて打ち。第三の點は最

初の二點の中央に上部に二點の各一方から二點の距離と同じ長さを以て結び付けられる處へ打つのである。是で三點から線を引けば、正三角形は作られるのである。

一八。此つまらない練習も必ず粗末にしてはならんのです。凡ての物体を畫く上に線は最も大切なもので、是を粗末にしては遂に何物をも描き出す事は出來ないのである。今上に述べた三つを組合して家の外壁を畫くとするに、長方形の上に三角形を重ねて大躰の形となし。上の三角形に重復の線を與へて屋根とし。長方形の上端の中央へ小なる長方形を畫いて窓とし。其下方に少しく右又は左に寄せて稍前のよりは大なる長方形の窓を畫けば、茲に此の課目は出來終るのである。

一九。併ながら茲に畫を學ぶ人に注意して置ねばならぬ事は、畫を書くには何時も何時も必ず右に述べた如く、規則的の物ばかりであると思つては

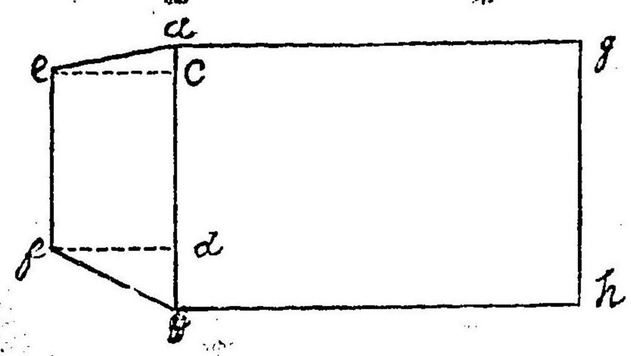
ならぬのです。自然から見出される物象の多くは、不規則な形ちした物の方が遙に多いのである。例へば正方形であらぬ物を畫くに當つて、正方形を畫く通りの方則に從つては出來ず。正しき圓形でないものを描くには、圓形とは違つた方法を取らねばならぬのである。併しながら違つた物を畫くには、其根本として正方形なり正圓形なりを畫く方法を知らねばならず。如何なる處に其差があるかをも見分ける事を出來る樣にするのが、初學者の研究す可き處である。假令面白くなくとも、無味乾燥であらうとも、是基礎を作り上げてから變化する處の形に移らなければ、正當の順序とは云はれないのである。

二〇。初學者に取つて頗る困難であるのは、建物其他の透視畫法である。水平線や。鉛直線抔は最も仕易い。何故なれば紙の椽などが、大躰の見當を付ける助となり得るからである。けれども透視畫法の傾斜した線と來て

は、遂に何物にも助けられる處がないから頗る困難なのである。であるから。筆を取つて描き始める前に先づ、此位で好いか惡いかと云ふ處の、傾斜の工合を充分目で以つて量つて見て。是ならばと云ふ大凡の見定めが付いてから、筆を取るのが好いのである。是故に最初地平線に向つて傾斜して居る線を畫く時には、其下へ假に地平線を引いて見て、如何位い傾斜して居るか、を調べ、其の割合に應じて他の線を描く事が必要として認められて居るのである。

二一。第一圖に示す處は並行線の透視畫法である。AE線BF線の傾斜は、CEとDFとの假線を想像して略〻定める事が出來。ACとDBとの離れ方の差に

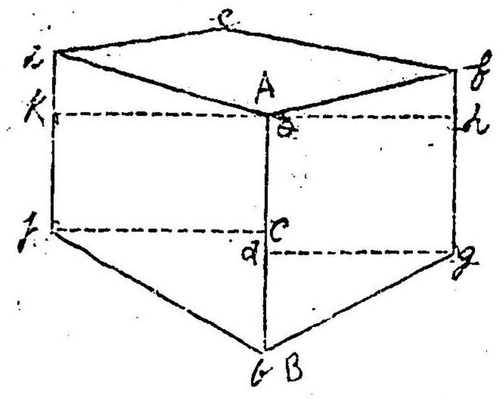
第一圖



注意して見て。是を原物と對照し點を打ち。同時にEとFにも原物と照し合はせて點を打ち、茲に始めて線を引く事が出來るのである。AE線とBF線とは透視畫法の順序を踏まずとも、右の樣にして其正當を得て居るものが寫し出され得るのである。

二二。對角透視法を行ふのは、前のとは一層煩しい事で。何故なれば、線の凡ては孰れも多少傾斜して居るからである。併ながら前に述べた樣な方法を適用して行けば、非常な過りなく描き出す事が出來るのである。第二圖は即ち此の對角の立方躰を示して居る。是を描くには第一番にABの線を引き。原物に依つて、LGの角を假想してCとDの點を透し。是

第二圖



と相並むだLGを造るのである。FGの線ILの線はABの線と一定の距離を保つて引かれるので。HGKとLの點はAB線の内のACD二點と相對して印されるのである。茲迄出來ればFとCの二點は原物と比較してHとKの點から容易に引延ばす事が出來るであらうと考へられるのである。最後のEの點は頗る困難であるばかりでなく。一番必要なもの故注意して考へられねばならぬのである。でAの點とを比較して原物に依つて描かれ得るのである。是丈けで先づ一通りは第一圖の如き立方躰の透視法も容易に簡略に寫し取る事が出來る事になつたのである。

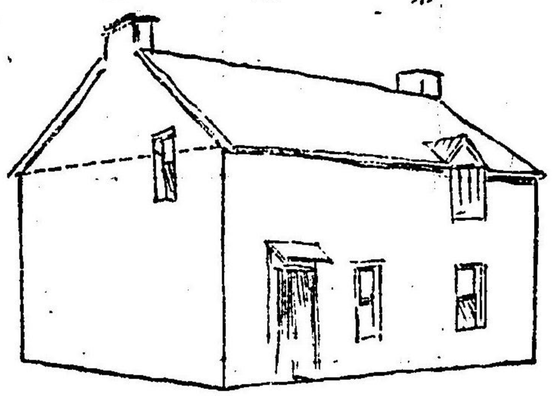
二三。是は度々云ふ如く面白味のない事であるけれども建物を畫く時には必ず欠く可からざる必要があるのであるから。面白味はなくとも充分に練習するの必要があるのである。

二四。第三圖も亦同じ練習を繰返すの材料である。唯前のと變つた處は

煙筒のあるのと。窓が四ケ所入口が一ケ所付け加へられた丈けである。

二五。是等の初歩の練習が終へて充分なる經驗が得られたならば。漸次に書らしい物を寫す事に進む事が出來るのである。次の第四圖の如きものは先第一に着手され可きもので前同樣頗る簡單なものであるけれども。少しく注意仕なければならぬ處は破壞された處と稍不規則の處のある事である。で其不規則な處は自由に手の加減して取捨して思ひの儘に寫しても差閃へはないので一筆一筆を必ずしも原物の如くに出來難い事で。要は其原物を了解する事が出來れば好いのである。

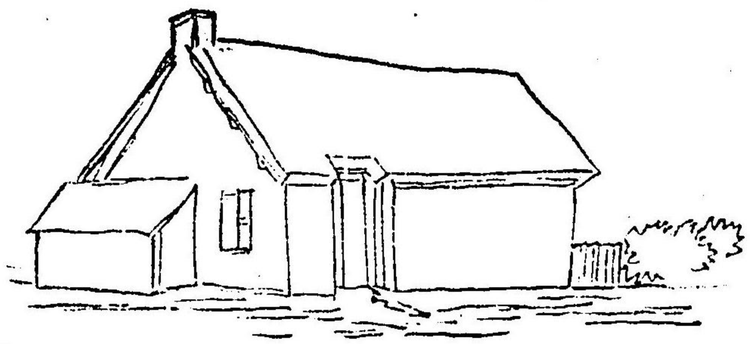
第三圖



二六。此の寫す可き目的物を了解すると云ふ事は畫者に取つては最も必要な事で。機械的に寫生するのと繪畫を作るとの差が茲から出來て來るのである。今一年以上も手本に依つて研究したならば。必ず立派に繪を描き得る樣になる事は。多分何人でも出來難い事では無からうと思ふのであるけれども若其間自己物を目的と

第四圖

第五圖



せずに。又自然物を見て了解する事が出來ない樣であつては。一年でも二年でも確かに無用に費消されたと同じ結果になりは仕舞いかと思はれる。如何となれば夫は研究の目的を錯まられて居る。否研究とは云ふ事の出來ぬ位いである。唯手本を機械的に寫す事を覺えて。頭腦の働き。又は自然物を見て了解すると云ふ樣な事は頓と爲る事が出來ず。全く死だ物より外に描く事の出來ない人であつて。畫家ではない。寫家と云ふ可きものと爲り終るからである。

二七。

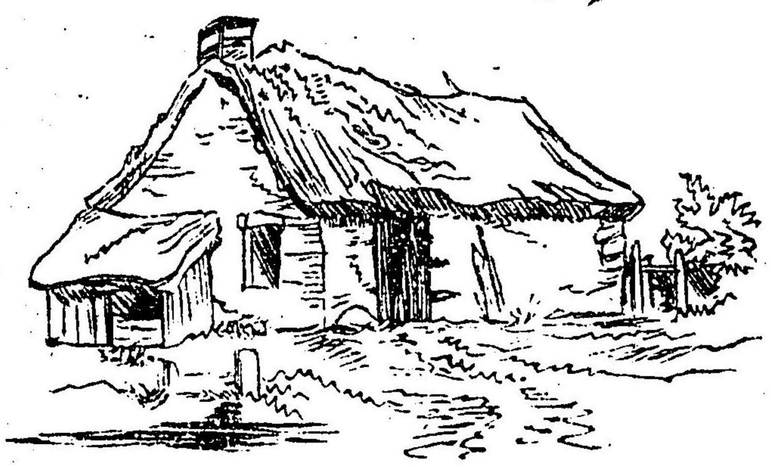
繪畫と云ふ事に就ては漸々に充分の說明をする事に仕て。茲には初歩に於て最も必要な事柄をのみ述べる事にする。第五圖は新しく建てられた小屋の圖である。是は繪畫として何の面白味も無く人を引付ける力は何處にも求める事は出來ない。線は孰れも眞直で堅く。畫面の全躰が單調である。是を次の第六圖と對照して見たらば如何であるか。遂に

次の圖の方が面白味がある樣に見受けられるではあるまいか。此圖は同じ小屋の稍、年古つた處を寫したもので。線は多く變化があると共に鋸の齒形をなして居る。如何となれば時の進むに連れて家根は傾き軒は崩れ。壁の石は處々缺け然も濕氣を帶びて苔をさえ宿して居る。諸處の合せ目は廣がつて輪廓は全く不規則となつて仕舞つて居る。此繪からは變化の多くが認められ繪としては凡ての單調を厭ふ可き分子が全く除き去られてある。最簡單なる一の小屋に於てさえ斯の如く研究す可き價値はあるのである。單に空氣に曝されて居る丈けで年の進みは恐ろしくも此の大なる變化を與へるのである。草や苔が家根にも庭にも又塀からぬ變化が起つて居るのであらうと思はれる。併し是にも尙云ひ現はす事の出來ない處に非常の變化が與へて居る。夫は正しく前に云つた了解力で觀察されるより外に說明の仕方はなからうと思ふのである。

二八。此繪に依つて知らるゝ處は總ての運筆の方が變化されてある事である。前の第五圖の唯堅く書きなされてあるのに比較して其變化ある筆が一層に面白味を與へる事が知られるのである。一般の規則として前面の線は凡て輕く畫かれ背面にあるものは力强く畫かれねばならぬのである。此法に依つて畫面に力を與へる事は同時に畫の性質を發輝するのを補助するものである。

二九。風景畫に於ては一般に線は點を打つて畫いたかの如くに始めも終りも確りと畫かれねばならぬ。人物畫の線は中央を太くして前

第六圖



後は柔に終るのを好しとしてあるのとは大に異つて居るので。風景畫には此線の確りしたのと整然するのが一般に畫面を引立てる効能があるのである。

三〇。圓影の線は時に風景畫に必要の場合がある。即ち塔の如き又橋の穹窿の如きものを畫く場合に用ゐられるのである。圓が完全なるものである時には。是を畫くに最も利便ある方法は最初水平線を描き。是を二分して點を打ち其點を中心として同じ長さの鉛直線を引いて。其各線の端を結び付ける線を以つて圓を作るのである。斯くすれば其四隅の空隙が不平均である時には容易に是を見付けて訂正する事が出來るので完全に近いものを得るに樂なのである。若半丸を要する時には同じ方法である事が出來る。其差異のあるのは唯水平線の上へ鉛直線を畫くに半分の長さを以つてすれば宜いのである。

三一。橋。天井。戸。又は窓に弓形を畫く時には其弓形をなす石材を畫くのが少しく面倒なものである。夫は殆ど凡てを石材の數に依つて等分し。最初上部の中央に置れてある要石を畫き夫を中心として左右へ畫いて行くのである。

三二。弓形の内には正しき角度を以つて作られたる如く。同一の角度を集めて彎曲を形造られたる如きものもある。

三三。茲に彎曲するものゝ他の形式を順次に説明をする。

拋物線を描いて居るので。即ち曲線が直に直線に混和せられて仕舞ふのである。水は初め流れる勢と重さとに依つて曲線を作つて落下り。忽に流れる勢は盡き唯だ動力のみに依つて眞下に落つるので。此力の鬪爭の内に特殊の弓形が作り出されるのである。樹木の枝又は他の物躰から雨の雫などの落つるを注意して見れば。夫が長圓形或は楕圓形を畫い

て落下する事が知られ得るてあらう。此事は特に初學者の爲めに弓形必ず圓の一部であると誤解されない樣にと思つて書き加へたのである。

三四。線を畫き初むる前に點を打つ事は又目を以つて遠近の距離を量る時に用ゐて効果を得るのである。其上に大躰の輪廓を取り主なる物躰を輕く着筆するのが都合の好い順序であらうか。此法の如きは最も適切でありて疏にす可からざるものかと思はれるのは。畫面に物躰を寫し風景を寫すに最も肝要なる處は其配置と結構の分配にあるので。始め點を以つて畫面を區分して其上に配置をすれば過は確に少ない事を得るからである。

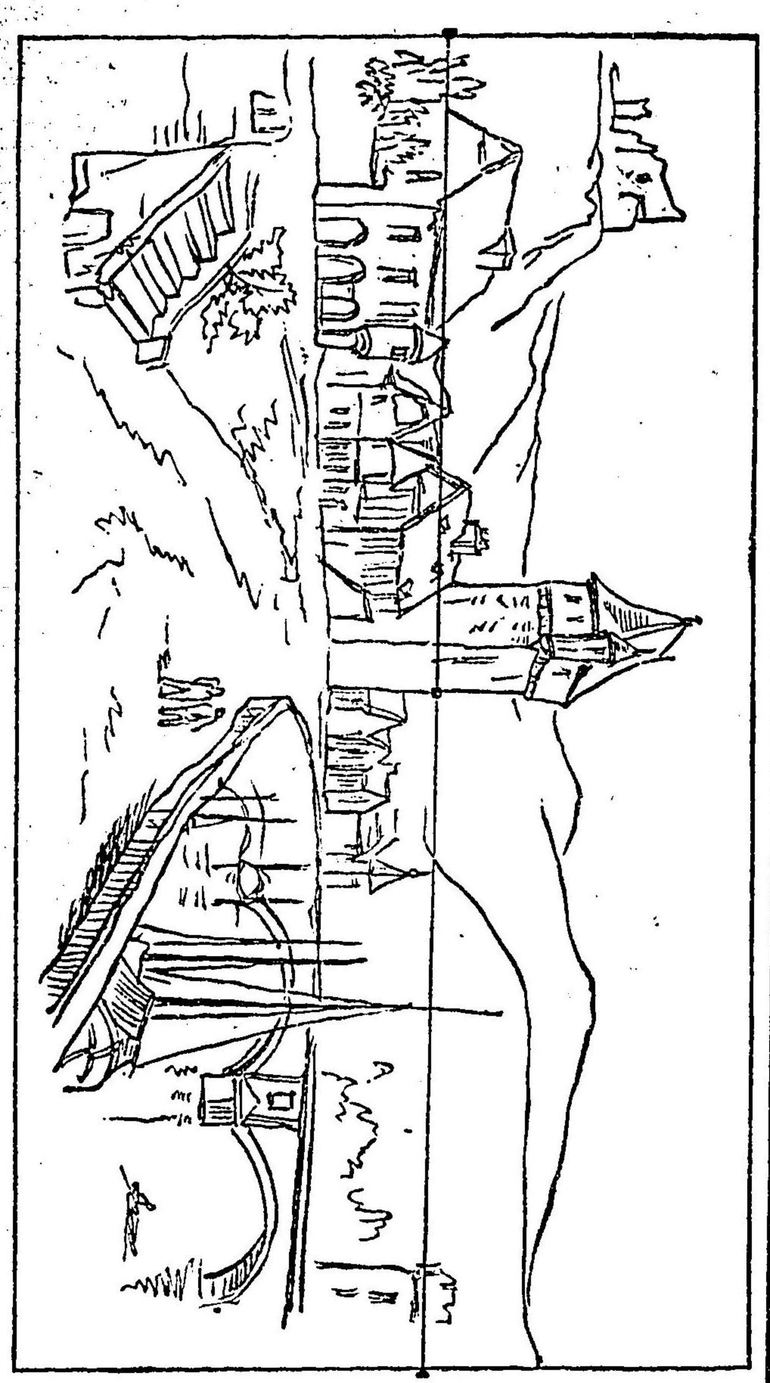
三五。最初に寫生を終り愈〻強い筆を使はふとする時には麹麭の片で前に造つた荒筋を見當の付く位に殘して消して仕舞ふのが好いのてある。左なくば輕く付けるにあるとは云ひながら。縱横に殘つて畫面を汚す恐れ

があるからである。

三六。畫の目的物を一度に見る時は多少混亂の虞があるに依つて。畫面を幾部分にも分ける事がある。先づ中央を定めて其處には何と何とを畫き。他の分けられたる數部分には何と何とを定めて畫き始めたならば其一部分は少しの混亂もなく整然として出來上り。畫面全躰を通じては相應に變化もあり複雜なるものが出來る。

三七。此方法は第七回に依つて示されたる通りである。併ながら此圖に於て分けられたる。通りに何の圖にも應用すると云ふ事は出來ないのである。其圖の異なるに從つて最も適當と認むる處に點を打ち適當と認める丈に分割すれば好いのである。茲に示したのは唯一つの見本たるに止まるのである。

三八。繪畫は常に左方の上端より畫き始めて。右方の下部に終る樣に筆



第十圖

を取らなければならぬと云ふ事は屢〻云はるゝ言葉であるが此理由は若し右方を先にして左方を後に畫く事となれば手や袖の爲めに右方の出來上つた部分を摩擦して汚して仕舞ふ恐れがあるからである。併しながら夫は陰影も付け繪の暗い部分とも描き終つた時の事であつて。始めの輪廓や。輕い筆づかひの物ならば此心配は要らぬ事である。然も初學者の人に初めの輪廓にも左方よりせよと云ふのは頗る無理な事である。何故となれば繪の中心たる可き目的物は如何にして納めよふかに苦まなければならぬ事になるかも知れないからである。で輪廓其他の輕い筆を使ふ時には都合の宜い樣に右からなりと中央からなりと始めたらば宜いので。夫れが濟むで。愈々深い色。暗い處。又は陰影の筆を同ふる時には前に述べた擦り汚す恐があるのであるから。左方から着筆して右方に終る樣に注意する事が肝要なる事であると思はれるのである。

影と日向

三九。畫の内で太陽の光を直接に受けて居る處を日向と呼び。其光線を受けざる處を稱して影とするのである。此兩者を併せて普通影と日向と云つて居るのである。

四〇。日向の處は時に依つて非常に強い光を受けて。影の處との區別を見分難い程の事がある。影は其深さの度に依つて差のあるものであるから。時としては極薄い日向と殆ど相接近する事がある。

四一。日向の表面は時に太陽の光を受くる角度の差に依つて光り方に違があるものである。太陽に面して直角であつたらば其物躰は光の全部の強さを受けて。角度が平かに置かれた時には光線は殆ど滑べり落されて。唯弱き反射を與へる丈けである。此試驗は簡單な方法で試みる事が出來

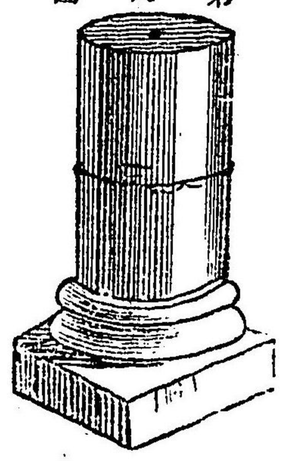
る。今書物を開いて机の上に置き。同時に木の葉を取つて是を太陽に直角に向けて見れば。木の葉の受ける光線の強さは遙に書物を照らす夫よりも以上である事が知られるのである。然して此木の葉を漸次に倒して見れば光を受ける度は次第〳〵に薄くなつて。仕舞ひに前の書物同樣。机の上へ横にすれば。書物の受ける弱い光線と同じものしか受けられない事になるのである。書物の一方を光線に背けて段〳〵に上げれば次第〳〵に暗くなつて遂に全部影になつて。仕舞ふ。其れを葉の影の部分と比較すれば葉の方が未だしも明るい。夫は何故である。と云ふに葉は光線を透して幾分か影になつて居る方へも透るけれども。書物は全く不透明で少しの光線をも受ける事が出來ないからである。

四二。此實例で見たる事實は。凡ての場合で誤りなき事實として現はれる。併し曲つた處の壁は唯其光線に

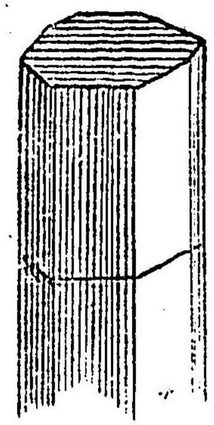
丈の光を以つて照らされるのである。比較して見れば僅に光を受けて居る事が見られ得るのである。

四三。第九圖は八角形の石材の圖である。其特殊なる形狀が其各面に當つて反射の工合の差異を以つて明瞭に現はされてあるのを注意しなけ

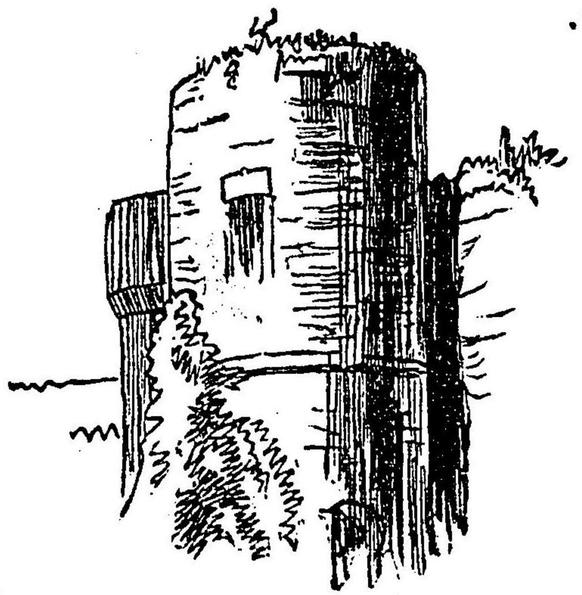
第八圖



第九圖



第十圖



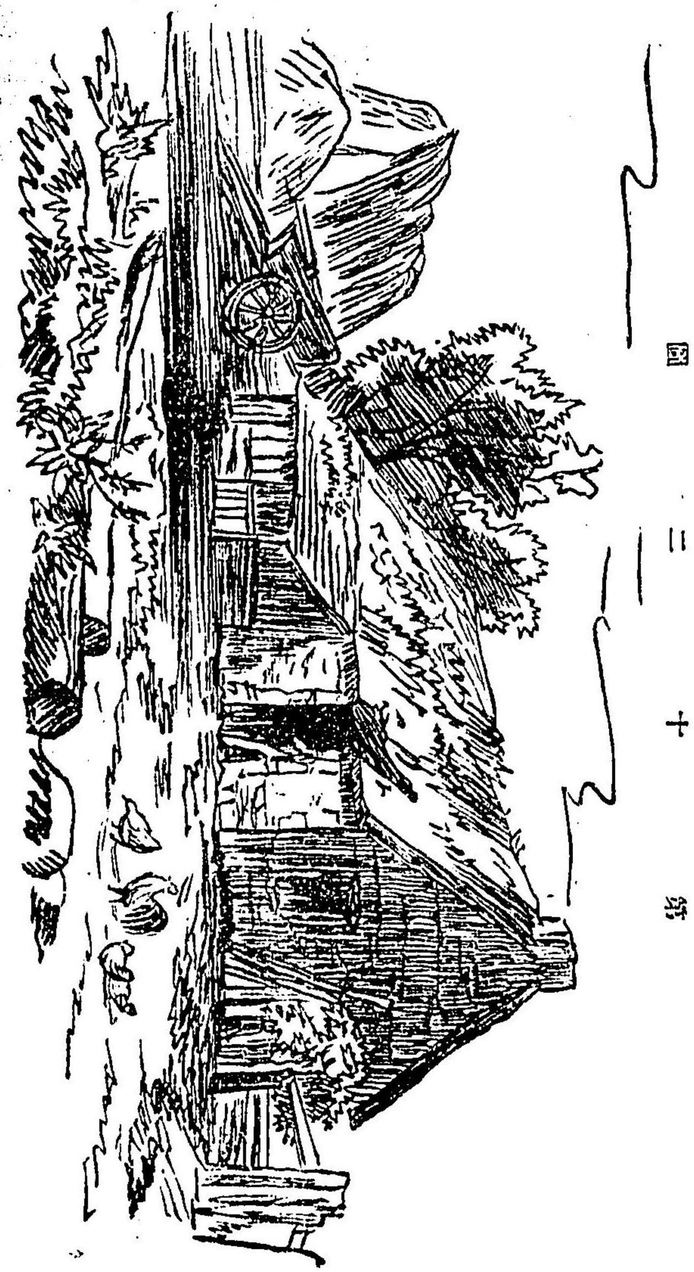
ればならんのです。第八圖に於ける如き、圓形の同じ經過が觀察され得るのであるが唯一つ違いのある處は日向と影との區別が九圖に於ての如くに劃然たるものでなく。順次に違へられてある事である。其光線に反對して居る處には垂直に光を反射して其左右へ寄るに從つて其度の少くなつて行く處も見られ得るのである。左方に影の薄くじてあるのは變化しつゝある輪廓に區別を與へるのに有用な手段であつて。右方から背面を透して行く處の光線との連續を示して居るのである。是は圓形のものを描く時に常に用ゐられる方法である。其最も影の強い處は丁度光線が其表面に達し能はざる處を以つて始められ。其右方に於ては圓形なる事の表明を助ける爲めに其影の筆を漸次に輕くして光線を受けて居る處まで來て居るのである。其背面へ投げられたる影は圓形の石材よりも增して暗く描いてある。是は此位いに暗くしてなければ力を失つて仕舞ふから

欠

MISSING

まだ完全でない事は何人も見分ける事が出來る事であらうと思ふ。光線は大膽に而も無意味に。影は平坦で其上單調である。總てに於て未だ出來上つたものでない事は知られるのである。變化と云ふ事が研究されねばならぬのは今此圖に依つて單調なる書が全く面白くない事を見ても知られるのである。併ながら自然は自然の儘、描かれねばならぬものである故に。若し強いて變化を作らんとして自然を害するが如き事があつては寧ろ大なる弊害とするのである。

四七。先づ壁に於ける光線を始めに研究せんに。其前面に向つて光線の當つて居る處と影になつて居る處に。石の割れて居る處や綴ぎ目を。自然を損ふ事なく。兩面を巧みに變化さして描き出す事も出來るであらう屋根も又荒い筆で其草葺を面白く書き出し。僅の線で。苔や。草なぞは。上へ行くに從つて注意深く密に畫くのである。其影になつて居る處には



圖二十新

反射の光を少しづゝ與へて明るい處との對照の爲めに思ひ切つて暗くしたならば面白い圖が全く完全に出來上るのである。

四八。 明るい即ち淡い色でも。暗い即ち濃い色でも。凡て色の中では線を成る可く輕く付ける事が必要である。夫れが餘り明瞭に畫かれてある時には非常に厭ふ可き目障りとなるのである。一番好い方法は鉛筆の尖を折つて鑿の樣な形にして置く事である。若し彩色をする場合には其尖つた處で各線を畫いたならば極手ぎは好く輕るい線が引けて。夫れで又明るいものが出來るのである。畫面を傷ける事無く目的を達する事が出來るのである。

四九。 陰影を與へる線は十三圖に示す樣な筆法を好しとするのである。是は前から練習して置いて必要の場合には自由に畫く事の出來る樣に要意して置くのが宜いのである。此方に依つて初學者は先づ平面のものを

畫いて見夫れが。充分出來る樣になつた時に側面を畫いて見るのが宜しい。是は練習し樣とするに最好い方法は。先づ一番暗い處から筆を卸して段々に明るい處へ筆を及ばせやつと見える位の處まで筆を運ぶ事をするのである。夫れが出來たらば次には明るい處から畫き始めて一番暗い處に筆を納める事の稽古が必要である。明るい處から始めるには最初筆を使ふに最も急に運び除々に力を加へ。運筆は緩くし最後の處に其筆を納めることである。

第十三圖

五〇。茲に常に心得て居なければならぬ二三の個條がある。例ば影になつて居る小屋の壁を畫くには其積上げてある石の大きさを畫き添へねばならぬ事である。

夫れは普通凡てが出來上つてから。B。又はBBの如き柔かい鉛筆で畫き又時に依つてはHBを用ゐる事もある。記憶して置ねばならぬ事は始め堅い筆で畫き其上を又柔い鉛筆で畫く時には線が處々二重になりなどして汚らしい出來となる事もある。若充分に畫き消す事が出來ないならば。目ざはりにならぬ樣に注意して筆を用ゐなければならず。要するに畫は奇麗に仕上げなければならぬのである。

五一。若十三圖の如き陰影の大きいのを畫く場合があつたならば鉛筆の尖を指から三寸程離して持ち。空の如き輕い筆づかひを要するものなれば尙更離して鉛筆の端を持つ位にしてゞも手の力が成る可く筆先に加はらない樣に仕なければならぬのである。

植物

五二。 植物と一口に云つても其種類は數限りもない。是は如何にして各〻其特長を書現はす事が出來得るであらうか。植物とは苔。草。牧草。樹木の各種類を云ふので今順次に如何にして各〻其異なる處を寫し出す可きかを說明する。

五三。 苔は其殆ど圓い形の集つて居るのを滑にして輕い筆を以つて注意して畫く可くある。明るい方に近い處は成る可く薄く。暗い方は稍〻強くならざる樣にし。線は其處々に依つて其力を變化させねばならぬ例へば強くすれば好い。其投げられたる影の色と出合ふ丈に前面に向つて居る處は輕く。後面へ向いて居る處は少しく強く。而して完全なものばかりを畫かず。中には崩れて居るのも自然に從つて寫さなければならず。影の外に其丸味を付ける爲めに薄い影を畫く事も必要である。

五四。 最一層奇麗に畫かうとすれば。明に續いて居る所は輪廓を省いて仕舞ひ。大躰の形をギザ〳〵の走り筆で拵らへて置いて其上に丸味を付ける爲めに暗い處を畫き加へるのである。第十四圖の如く。

五五。 草は尙苔よりは一段畫き現はすのは困難である。是も又畫き始める前に充分に手の熟練を經ねばならぬ。夫は第十五圖に示す各圖の畫き方を充分應用の出來る迄熟練する樣稽古を仕なければならんのである。是は單に草の葉の集まりを以て輪形をなさしめたものであるが。初めは右からなり左りからなり。一方から畫いて輪となし。夫れが出來上つたら次に他の一方から畫く事を稽古して漸次に左右、

第十四圖

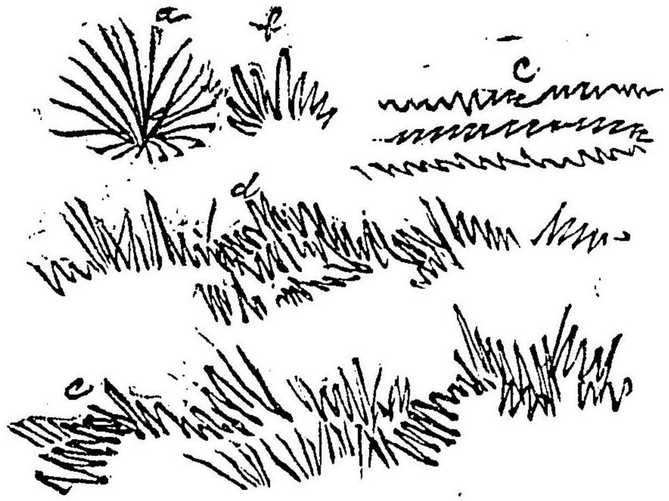
第十五圖

上下跳れから
でも滿足に出て
來る樣にする
のである。

五六。此練習は充分成功する迄續けて稽古されねばならぬのである。若し出來上つてから次の畫き方に移れば筆づかひの馴れたのが土臺となつて存外樂に進む事が出來るからである。

五七。草は一般に圓い形に生え其葉は中心から四方に延びて外の方に擴がる。第十六圖のAの樣になるものである。併ながら如

第十六圖



何なる草をも此一通りの筆づかひで寫し出す事は出來ぬ。故に今一つの方法。即ちdの如き畫き方もある。

五八。草には自然に種々の異同あるを以つて。同樣に畫き現はす事は出來ない。Cの圖も又草を寫し出さんとする一方であるけれども是は少し不自然で。ぎごちない處がある。凡て此の樣に蜈蚣か何ぞの樣に長い線は餘り面白くはないのである。最少し自然的に然も變化のあるのはDで是は唯線の長さと方向とに變化を持つて居るのであるけれども。又何れを主眼の點とも見分けられれば。稍力のない畫き方としか見られないのである。

五九。尙一層研究をしたならば。意の如く多少光線をも働かせ。强味をも持たせ得る樣になれるのであらう。

六〇。晴い後景を以つて明るい草を畫かうとすれば第十七圖の如く。鉛

筆で草と影との區別を書現はす事が必要である。即ち暗い處丈に鉛筆を用ゐ明るい處には是を用ゐず白く紙を殘して暗い處と相對して極立つ樣にするのである。

六一。時に大なる草叢を畫面の一部に採用する事があつたならば。最初第十八圖の如く始め輪廓丈を畫き次に十九圖の如く短い線を程能く畫き入れて面白味を付け加へ又草の葉の大躰の形を書き現はすのである。

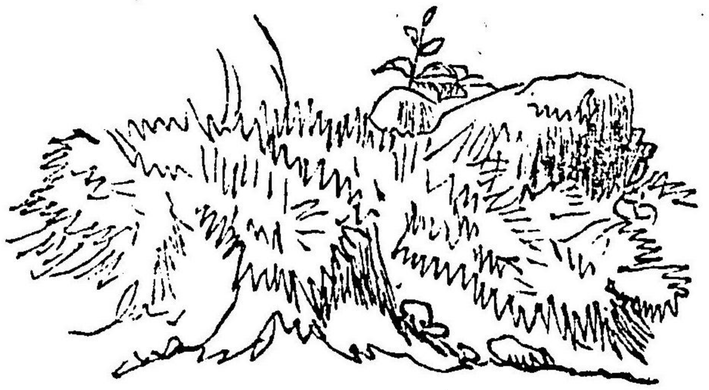
六二。初學者は凡て是等の作用を了解せねばならぬ。輪廓は主要なるもので凡て寫生に依つて作られざる可からず。去れども其内側の描寫は規則的に前に熟

第七十圖

練した筆を以つて畫く事が出來るのである。多くの初學者は自身の不完全なるを以て推し此十八圖に示したる輕き輪廓は雪と間違へるかも知れない。併ながら是は鉛筆畫の特色で。止むを得ぬ處である。然れども最後の筆を用ふる事に依つて如何に巧みに自然を寫し出し能ふかは示す事が出來るの

第十八圖

第十九圖



てある。

六三。牧草と草とは眞物に於ても類似する如く描法も又區別する事は出來難くある。併ながら畫家の描く例に依れば大概牧草は草の生へたる大なる廣場を以てせらるゝ樣である。て色々に變化をも與へ。光線を受けて輝いて居る處と又其照應の爲めに強い影を與へて單調にならぬ樣に務められる樣である。大なる葉の植物は主に前景に置れて。大なる光線と。鋭い陰影とを付けて。前面を力強からしめ又其照應の爲めに稍離れて淡色のものを置れるのである。

六四。此處を寫生せんと思ひ付いたる處があつたならば先第一として初學者に望む處は清潔に明瞭と畫き上げて。影を付けるには正確に又大膽にやらなければならぬのである。

六五。鉛筆寫生では即時に細い處まで筆を着ける事は到底出來難くある

故に大なる葉を畫く場合には輪廓と眞中の心とを丁寧に寫生したらば先十分として置かなければならぬ。

六六。尙又葉の方向の異つて居る爲めに光線の受け方が違ふと云ふ事も注意しなければならぬ。光線に背いて居る方は影になる事と。古い葉の皺。卷くれたのなどが暗く畫かれねばならぬのである。

六七。色々の種類の枝が一所に固つて生えて居る時には。其各々特殊の長さ。形。位置を注意して畫き分けなければならないのである。

六八。羊齒の類は時に前景に。其形に變化あり。美しい蒼生をなすものである爲めに。採用せらるゝ事がある。とは云へ其細い處は鉛筆では一寸寫し悟い。第二十圖の如き。唯其一部を示す丈けである。併ながら。注意して筆を着ければ鉛筆なりとも寫し得ない事はない。先づ前に述べた如く鉛筆の尖を鑿の如くにして。始め心を畫き後に鋭い畫き方で上の

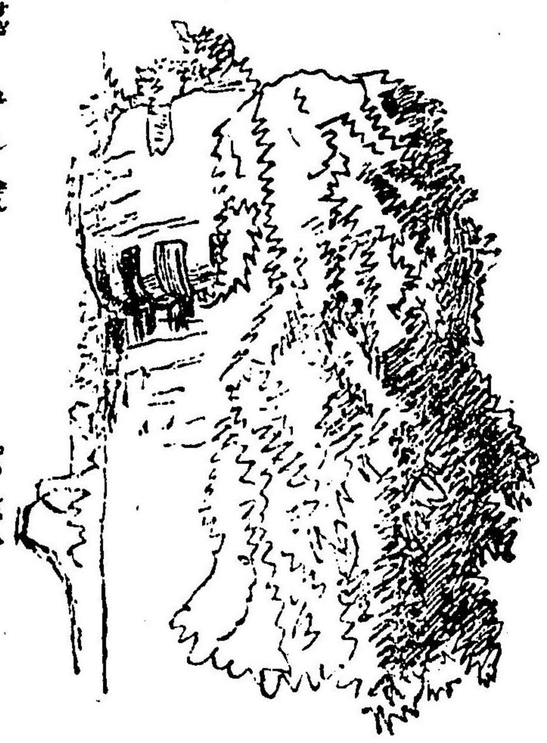
方から外へ向けてさ〳〵を拵へながら畫き下ろせば兎も角一通りは出來るので。是も充分熟練を經れば。滿足に寫生が出來る樣になるのである。

六九。 暗い草叢の上に光線を畫き現はそうとするには最初影の方を畫いて置いて。羊齒の形に白く光線の當つて居る處は殘すのである。而して其白く殘された羊齒の葉に二三の輕い線を畫けば夫れで出來上るのである。

七〇。 蔦は二十一圖に示されたる如く常に葉の密集したる輪廓を畫く丈けで寫されて居るのである。其葉は鋸形である故に。運筆は其葉の如く角ばつたぎざ〳〵したものでなければならぬ。而して其茂みは

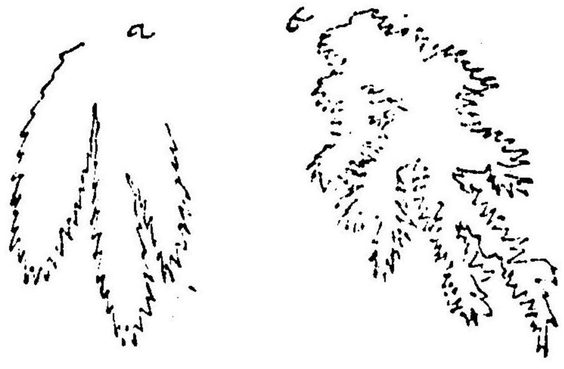
第二十一圖

第二十一圖



密集したものである故に。影は暗い。確りした筆で畫かれねばならぬ。初學者は二十二圖のAのごとき運筆は爲す事ある可し。是では餘りに堅過て不自然にもあり。面白味もなければ。B

第二十二圖



に示す如く。其輪廓は成る可く變化ある樣に注意しなければならぬのである。

樹木

七一。樹木の幹は圓筒形をなし影日向の區別をなす處は宛も第九圖に異なる事はない。其皮には各粗密を異にして皺を有して居る。荒き圓筒形の關係を十圖に於て示したる如く。殆んど同樣の働を光線に對して持つて居るのである。夫れは高い光に當る處と影の始まる處とは大概劃然たる筋をなすものであつて。四十五度の方度を以つて光線に對する處には其樹皮の組織は明瞭に見る事の出來ない事も。第十圖と殆んど一般である。

七二。此樹皮の皺又は荒さは種々相違はあれども先づ第廿三圖に示す如く短い線を以つて寫し出される。同時に此線は光線に近づくに從つて短く又細くす可きである。

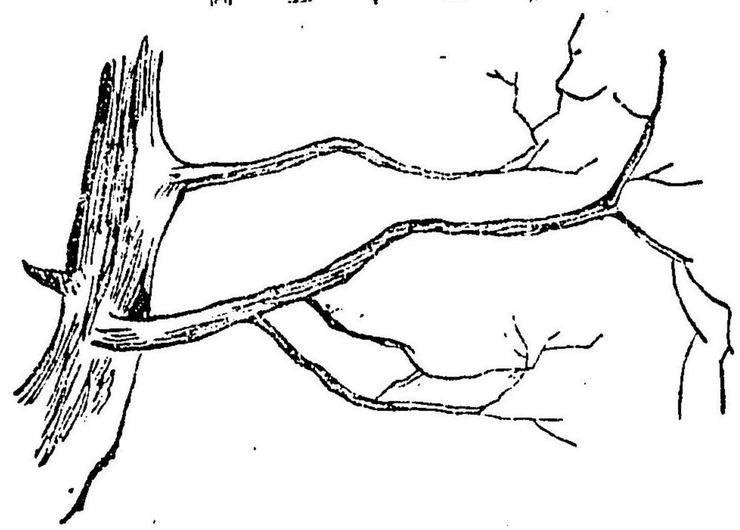
七三。四。樹身即幹は普通根より數尺上より根に近づくに從ひ稍太味を帶て居る。併ながら其上は枝が分れて居る處までは先づ同じ太さで。分れて居る處から一時に細くなつて居る。夫は殆んど同じ割合を以つて枝の分れて居る度毎に少しづゝ其太さを減じて居る事が。先普通の規則て

第二十三圖

ある。枝に於ても此事は全く同樣で地から樹幹の生へた樹幹から枝の生へて居るのは矢張り稍、細くなつて。枝と枝が分れる

第二十四圖

第二十五圖



處で又一段と細味を增して前後の枝に小枝が盡きる處まで次第〳〵に細くなつて行く事第二十四圖に示す如くである。

七五。 初學者は此枝も。幹も先へ行くに從つて細くなると云ふ事に餘程重を置かなければならないのである。稍ともすると其太さを誤つて端の方は元よりは太くしたりする事が間〻ある。第廿五圖の如くで實に不自然な面白くない事なのである。

七六。 枝にある皮の皺は其樹幹にあるのと同樣ではあるが。樹幹のと比較すれば極細いもので。夫も枝が細くなるに連れて尙更に細くなつて居るのである。

七七。 前に述べた。影日向の事は此處にも全然適用する事が出來るのである。幹でも枝でも光線に直角に向つた時には反對の最高き度を受け其角度の次第に減ずるに從つて受くる光線の度も次第に少くなるのである。

其故に此曲屈したる樹木の枝には其一本毎に殆ど光線の凡ての働を示して居るのである。

七八。枝に投げらるゝ影は。他の枝と葉に依つて造られ。他の枝と葉は又他の同じものに影を作られて居る。是等は充分自然に依つて研究し。其特殊な處を會得する事が必要である。

七九。影の輪廓の強さは。其影を投ぐる處の物躰に近づくに從つて增されなければならぬ。地上に投げられたる石の影は其縁の處が一番強く。離るゝに從つて弱くそして消えて仕舞ふのである。地に寫つる樹木の影も夫と同じく影の始まる處即ち其根の處が最も強く而して明瞭で幹。枝と地から離れるに從つて弱い。朦朧とした影を投げるのである。枝の影が。次の枝に投げられる時にも最も接近した處が一番強く明瞭で其先の方の葉や小枝の影は前と同じ理由で漸次に薄くなつて居るのである。

八〇。最一つ茲に注意を要する事は影の濃淡は影を投げる物躰に依つて差異のある事である。假令ば小枝から投げられた影と。幹から投げられた影と何れが濃く何れが淡いか。枝から投げられた影と。枝からのは夫よりも濃く而して鋭く。枝からのは夫よりも弱く。小枝のは尙又夫れよりも弱いのである。

八一。樹木を畫く時には其凡ての幹。枝小枝が圓筒形である事に大なる注意を拂はねばならぬのである。是は凡て圓筒形のものに影の投げられたる時は想像して其中心點を見出し。是を先づ暗く描き出して。漸次に影の日向に接する處へ向つて其筆を淡くして。同時に高き光線と影との間に其樹皮の性質を現はす爲めの筆を入れて客易に圓味を現はす事が出來るのである。

八二。樹に依つては枝が長く引摺る柳の如きものもあれば。直角に屈曲

して居る樫の如きものもある。畫者は宜しく此種々雜多なる樹木を畫く時に一々充分の注意を加へる事を要するのである。若其注意が足らず。了解が出來ずに筆を取るならば必ずや樫の木に柳と同樣の枝を書き加へる如き事が出來ないとは云はれないのである。

八三。茲に今一つ注意を要する所は樹木の性質に依つて枝が幹から分れる處の角度に著しき相違のある事である。同時に枝から小枝の出るにも甚しき相違のある事である。

八四。同時に注意す可き事は樹の枝が上るに從つて其生へ出づる角度に差を生ずる事である。是は何の樹にも大概見出さるゝ事實で。其差こそあれ先づ共通規則として見る事が出來る。即ち一番下の枝は多くは直角に延び其葉を持つ處は稍下へ傾く程であるのに。上へ行くに從つて枝は漸次に眞直になり。頂上の枝には其葉は上に着く樣にあるのである。

八五。樹の主なる枝は光線の發射する如く四方に向つて居るので。凡ての葉とは直角をなして。樹身に向つて居るのである。

八六。枝の傾斜の工合に此變化のある所以は。葉が光線。空氣。濕氣に曝されねばならぬ故である。故に最下の枝は其上の枝とは下から外へ出る樣に生へ出づる爲めに自然に葉の重量が增されて下へ傾ひき幹との結び付られて居る角度を變化せしめられるのである。

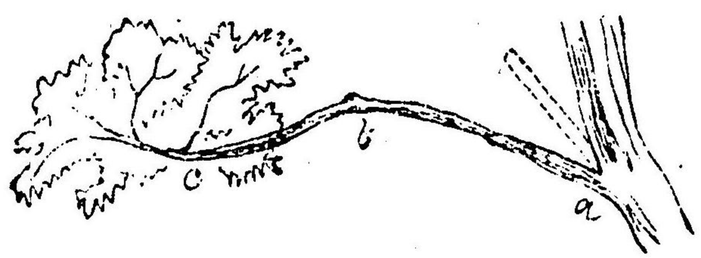
八七。葉の重量は其枝の正當に發生す

第二十六圖

可き方向に變化を與へる。第二十七圖はAに於て樹幹より發生せる枝の方向を示すものである。此枝は其葉の發生前に於ては點線の方向に向つて延びて居たのである。AからBの枝は確に其徵候を伺ふ事の出來る所であつたに。BからC迄の發生と共に其枝のみの重量と。葉の重量とに引かれてBからCが稍下へ向ひて延びたのみならずA。Bの枝をも同じく少からず傾斜させて仕舞つたのである。

八八。 樹を畫く時には必ず一般の枝の重量と云ふ事迄も考へて懸らねばならぬ。樹の性質として彈力を多く有するものは其重量に從つて傾斜する時に或は弓形をなすものもあるが。樹の木の如きさく〳〵した木は例へば重量の爲めに傾斜する事があつても。同じく直角的に傾斜するのである。

第二十七圖



八九。 樹木の枝の強弱は。其樹の有する葉の重量に從つて比例的に造られてある。例へば柳。樺の如きものゝ葉が細く而して輕くあると同時に。樫の木の葉は如何にも厚い。密生する如きが自然の巧みの程を察し得らるゝ處である。

九〇。 第廿八圖に示す如く。狹き道路の兩側にある樹木の內側の枝は正しき角度で上へ向いて居つて頂上に近い處

第二十八圖

てなければ廣がつて居ないのである。集めて植えられた樹木の枝は決して大氣に觸れ能ふ處で無ければ其枝も葉も廣げないのである。是等に依つて。一本の樹木と。叢生したものとが此圖の如く密接して植えられたものとが光線又は空氣の關係から。枝や葉の生育の順序に。差違のある事も又記憶して置かねばならぬ事であらうと思はれるのである。

木の葉の種類

九一。草木の葉は描寫する技術は最も手腕の熟練を要し最も自然に近邇せん事を必要とするのである。他の風景畫の各部に比して最も重要なりとしてあるのである。手腕が若し充分の熟練を經て居なかつたならば葉を描くに當つて凡ての部分が全く不器用である事を遠慮なく白狀して仕舞ふのである。で尙其寫さんとする樹木の目的が充分了解せられて居ら

ぬ時には如何に手腕が巧みなりとも其作物の不自然なる現象を以つて必要なる智識の缺乏し居る所を知られ得るのである。何となれば木にも草にも各々其特殊の區別差異あるを以つて。各一つづゝの木の性質を描き現はす事の出來る迄手腕の練習を積まねばならぬのである。例へば今初學者非常に勉强して漸く柳の葉を描く事を會得し尙充分に練習を遂げたりとするも新に樫の木を寫さんとすれば全く不成功に終る樣なものである。松も杉も榎も槻も梅も又櫻も如何なる木でも是は一〻比較したなら其形狀だけでも。何れも相異つて居るのであるに。何として同じ樣なものは描いて濟む事であらう。決して混同せぬ樣に注意して描き分けねばならぬのである。此事に就ての過誤は決して尠くはないのである。唯一通り樹を畫く事は覺えて何の木でも容赦なく描き立てるのみならず又草でも何でも描く程の人も決して無いではないのである。併しながら最後

に此事は大した困難ではないので。手腕を熟練させると云ふのは既に一般の處で充分出來て居る筈である。畢竟唯其區別差異を會得する丈けである。自然の特殊なる性質を數多く知ると云ふのは決して不愉快な事ではないでしよう。自然の美の完全なる一部づゝを研究して行くので。結局自然に對する趣味を廣くすると同一なる事であるから。

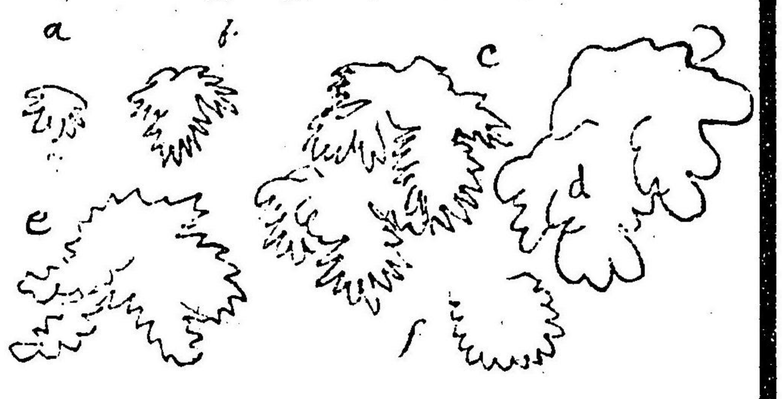
九二。 前の十五圖に示した如きものが手腕の練習の爲めにするには最好い手本である。葉の單一なるものを畫くには練習なしには到底爲し得可き事ではない。鉛筆が自由に執れの方向にも用ゐられる位迄の程度が必要なのである。願くは此小課目を以て以上の研究を仕樣と云ふ人こゝの第一の練習とせん事を望む。若是が充分に自在に描く事が出來たならば木の葉を描く事は最早左程の難事ではない筈である。

九三。 次の課目は第廿九圖のAに示されたる如き樹木の葉の一束を寫す

事である。葉は必ず其自身の重量の爲めに左右に傾斜し本枝に殆ど觸れて居る事までが想像されるのである。Bには此樣の葉が三つ集つて居るを示し。Cは前と同樣の樹木の同じ枝に茂つた葉を示したもので。夫を見れば一枝一枝の葉が同性質で同じ樣に下へ垂れて樹の枝を掩ひ匿して居る事が見られるので始めDの如く大躰の形を寫生して置いて後に其全部をAの筆法に依つて描いて行くのが順序である。

九四。 樹の葉を描くにeの如き筆つかひを用ひてはならぬ。何となれば夫は或處は下垂し或處は上を向ひて。無意味に而して不自然なもので。是を

第二十九圖



以つて葉なりとしても誰人でも首肯ある事は出來ない筈である。

九五。 畫家の注意は樹木の枝と關聯して其葉を支へる所の小枝にも同樣に考へを與ねばならぬのである。茲に示す卅圖のB鋸形の葉の輪廓であるが。其誤りは初學の人にも容易く指摘し得る處であらうと思ひのである。

九六。 葉は時に明るい事もあれば。又明るい後景に反して見られる事もある。是は誠に簡單に輪廓の付け方丈で區別をする事が出來るのである。併ながら樹木を描く時には葉は暗い處で却つて明るい光線を受けて居る事もあれば。明るい處にあつて暗く見られる事もあるのである。後景が暗い時には最初先づ明るい部分の葉を畫き次に暗い時分の葉を畫くのが順序である。其暗い處を畫くには頗る運筆の熟練が必要で稍、困難なる者として認られて居る。即ち鉛筆の平つたい處を以つて後景へ第三十圖のBの如く廣い線を描き。然る後Cに於て示したる如くに葉の形を作り上

げる事である。今後景の明るいのを描くのは最も容易なものである。幅の廣い荒い筆づかひを以つて暗く畫き現はせば好いのである。

九七。 樹木を畫く前に初學者は其樹が如何なる筆づかいを要するかを知る爲めに其樹の形を熟視する事が必要である。柳の如きは葉が長く狹い。故に長い運筆を集めて是を摸す事が出來るが。樫や梅の葉を是と比較すれば幅は廣いが長さが短い。さすれば其筆法も違へなければならぬ。夫は若し柳の葉と櫻の葉とを混合する樣な事がありては不自然此上なしと云はねばならぬ。初學者の注意しなければならぬ處である。

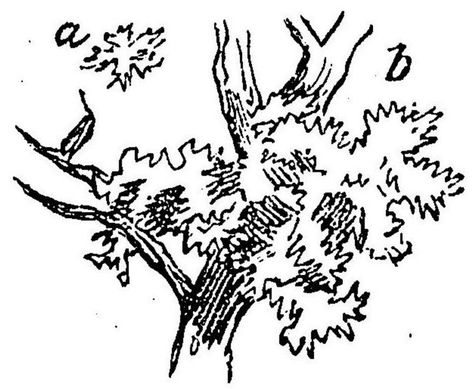
第三十圖

九八。樫の葉は。是を描くに他の物の樣に凸圓形を以てする事は出來ない。第三十一圖のAに示すが如く凹形に筆を用ひなければ其の性質を寫し出す事が出來ないのである。で是を澤山に集めて畫くには圖中のBの如くにせねばならん事も同じく深く記憶せられなければならん處である。

九九。縱の木の葉は草を集めて描くが如き筆法で少しく嚴格に第三十二圖の如くに畫けば好いのである。

一〇〇。風景畫を作るには他に種々ある樹木を描寫する必要が起つて來るに違ひはないのですが。今迄述べた處で。兎も角一通りの運筆は了解

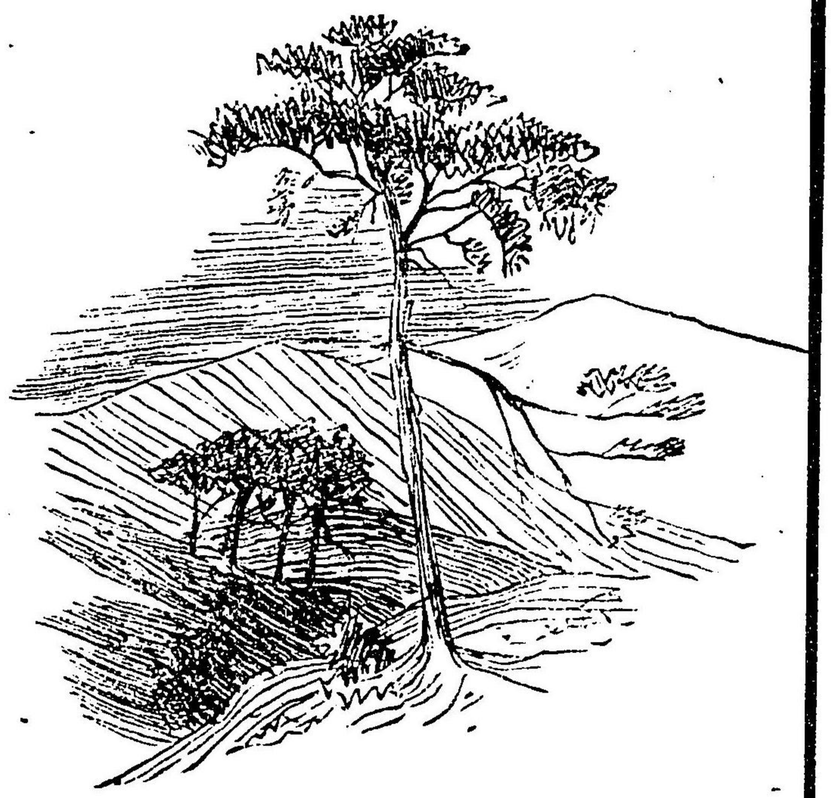
第三十一圖



せられたと思ふ。て此後は如何にしたならば其の木の持長を現はす事が出來るかを熟考して。夫から一躰の輪廓即ち第二十九圖のAの如きものを充分枝のある事を見量つて注意して描き。次に明るい部分を荒筋に畫き現はして出來上つた處で其線が僅に見分け得る丈に消して仕舞ふのである。

一〇一。影の部分は其後に初められる。最も暗い處から筆

第三十二圖



を着けて。強い光線に當つて居る處丈を白く紙の儘に殘して暗い色を付けて行けば充分なる畫面の力が現はされ得るものである。

一〇二。凡て木の葉は遠い處より近い處のものが非常に大きく見えるのであるから。始め近い處を大きく大膽に畫いて。次に遠い處のを小さく。而して輕く畫いて行かねばならぬのである。

遠近

一〇三。風景畫に於て遠近を巧みに寫して自然を摸する事は最も困難なるものとしてあるけれども。其方法の細目を擧げたならば又一層に面倒なものとなつて來るのである。前景にあつては少しく辛抱して執筆すれば出來るものでも。是れが遠い距離になつて來れば其寫し方は非常に六つ敷いものとなるである。

一〇四。樹木が遠距離にある時は其葉は肉眼に見る能はざるものとなる。鉛筆は淡く使つて。其葉の茂つた處を寫し枝や幹を描く事よりしか。現はし方はないのである。

一〇五。夫は尙更一層遠い處に移せば。大躰の形が見得るばかりとなり。二筆三筆に寫して仕舞はなければならぬ樣な簡單なものとするのである。

一〇六。遠く隔てたる森を寫すには。樹木の頂上丈を圓く描いて。幹は澤山の內で最も近い端から見られる數本を描けば好いのである。

一〇七。遠近の區別を付けるに最も必要なのは前述した空氣透視法である。空氣の作用は繪畫には最も影響ある處の漸進の美しき變化を以つて遠近の差を特に著しくするものである故に。風景畫を作らんとすれば遠近の物躰の色の調子を熟察して。一個處に用ゐた暗い色を以つて違つた場所のもの迄描く事の無い樣に注意する事が必要である。

彩色畫

一〇八。光線の工合を助ける爲め又は影日向の調子を強める爲めに時に依つて色紙を用ゐて畫く事がある。是は白紙へ畫くよりは勞少くして其結果が存外面白く出來るから物好きな人は。屢々用ゐられる事である。此場合に日向の光線を畫く爲めにはジンクホワイト即ちチワイニースホワイトと呼ばれたる畫具を用ゐるものである。

一〇九。白紙が自然に有する處の冷い青味を帶びた色を消す爲めには鉛筆も繪具も少しも用ゐない内にエローオーカア又はカドミユムエローを淡く引く事がある。夫は出來る丈注意して淡色に仕なければ乾いてから。存外濃くなるものであるから。思ひ通りよりは控へ目に淡くして置く必要があるのである。夫で白く置く可き處は其儘にして置いて其外の色

を用ふる時には前の色を混和して第二の色を出す樣に其加減をして筆を取らねばならぬのである。詳しくは次の水彩畫法の内に記してあるのを參照せられたし。

實景寫生

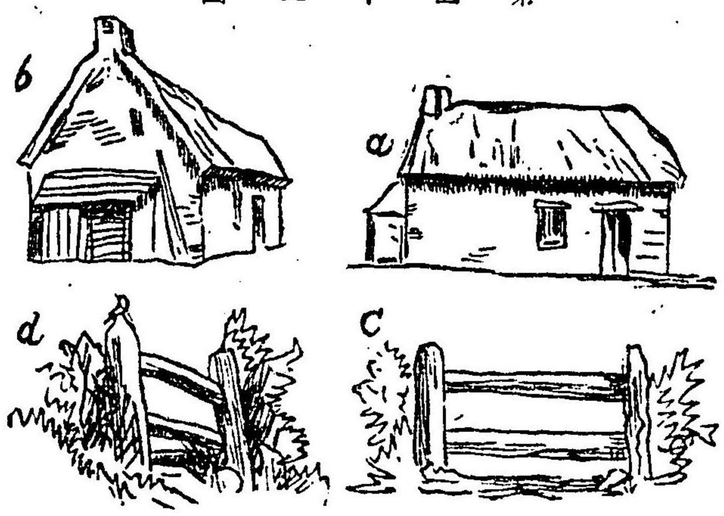
一一〇。初は成る可く簡單なものが稽古するには適當である。古き小屋。路傍の門。土橋の樣なのが好いのである。夫は一つのものでも着眼點の置き方に依つて隨分澤山な圖を選む事が出來るのである。で夫は正面から寫す事は成る可くは避けなければならぬ。で一方の角に向つて寫す樣にしたのが好い。假令ば第三十三圖の如く。B又はDの如きは簡單であるとも繪を爲して居るけれどもA、Cの如きは堅く又餘り眞四角で面白味がないからである。

一一一。實景寫生に要用な道具は手本を習ふ時のと皆同じてよいのてあるが。寫生用の椅子と畫囊又は寫生帖があれば上等てある。

一一二。透視法の規則に依つて各線を正則に寫し出そうとするには頗る注意を要する事てある。目は非常に迷はされ易いものであるから。十分夫を防禦する法を取らねばならぬ。第一に寫生帖の上端を自分の目を水平に置き其下方は段々に傾斜させて置くのがよろしい。

一一三。最初先づ輪廓が出來ればよろしい

第三十三圖



次に其畫中の重要なるもの。主なる物眸を作つた上て。漸次に完成させるのてある。

一一四。餘り用心を取り過ぎても。却て眞を寫す事が出來なくなる虞があるけれども。誰人の說にも大膽な筆法や。畫法は成る可く用ゐない樣にと云はれてある。畢竟上手になるには最熱心に又最注意して夫れて長く研究した上てなければ出來ない事てあるのてす。

一一五。兎も角も多少經驗を經て自分に覺えのある樣になりて來れば適當な所へ適當な着筆が出來。少くとも完全なものが出來て重要なる物を寫し出す事も割合に樂に出來る樣になるのてある。

一一六。廣く〳〵とした。景色を一幅に納め樣とするには最初寫生の出來る景色を見立てゝ定める事をする。是には小さい目鏡の樣なものを作り其中へ適當に分割した線を引いて置いて是て景色を眺める。左すれば何

處の景色は如何圖にしたらば繪になるであらうかを。他處に心を移さずに見付け出す事が出來るのである。是は其目鏡と同じ割合に寫生帖の紙へ分割した筋を引いて置いて其目鏡に寫る通りを寫生すれば最も容易に最も好いものが寫し出されるのです。

一一七。尙夫れよりも簡單な方法は寫生帖を目と同じ高さに其一端を上げて。實景の寫され可きものと對照して。其見る通りの景色に依つて遠い山は何の邊。川は何處。木は。橋はと云ふ風に點を。打つて印を付け夫から書き始める事である。

一一八。前にも云つた通り地平線は先三百六十度に割られたものである。で寫生す可き。寫生し得可き地平線の長さは大概四十五度以上六十度又は七十度に止まるので。夫以上を寫し出そうとすれば透視法の一方が角度を非常に高めなければならない事になつて。勢ひ畫は彎曲した樣なも

のになつて仕舞ふのである。

一一九。若目的の物象が建築物であつたなら。此理屈は尙更肝心なものである。建物が彎曲して寫し出され得可き筈はないのですから。で如何しても澤山の度を描かねばならぬと云ふ場合には着眼點を遠ざけて目的物の眼界を廣くする。左すれば角度から行けば左程に廣くなくとも滿足に寫し出す事が出來るのである。

一二〇。着眼の點が定められた時に。荒い圖取りを一部分づゝ始め。全部夫れが出來上つた時には。細い處を描く前に其景色の肝心な線を描く事が必要である。で其線は是を其實地の風景と對照して若過りがあらば正さなければならず。全く誤謬なく自然其者と同じく畫く事が出來たならば其時に始めて細い處へ筆を着けるのが順序の最も通常な方法である

一二一。實景を實驗して居て最も多くある場合は一度も實驗した事のない物を描かなければならぬ事が出來て來るのである。即未嘗て描いた事のない新しい物。建物の或種類。草木。小山。地。水。空の如き嘗て習つた夫れとは一種異つたものに出會した時には決して恐るゝ事はないのである。自分が最初目に這入つた時に斯うと思つた通りに雖て着けて見るのが好いのである。

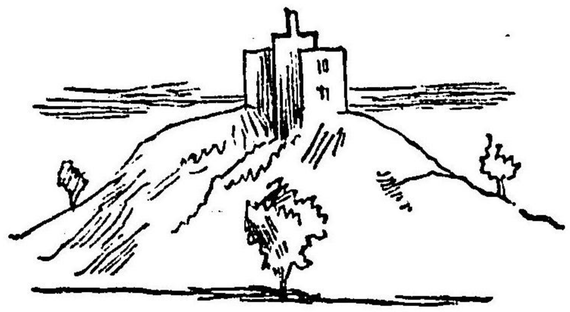
位置と結構

一二二。藝術は其何の種類たるを問はず。一大規則を持つて居るものである。然も其藝術は其規則のあるに依つて存在を保つ事が出來る程肝要なる大規則を持つて居るのである。斯の如きは動もすれば不必要の如く考へられ得るのである。自然の景色を寫生するが如き。寫眞と同じに其

實際を寫す事が出來るのであるから。其に依つて得る愉快も同じである遂い其間に何の規則をも容るゝ必要がないとも云はれるのである。併ながら。少數のものは右の如くにして豫期したる滿足を得る事も出來るであらう。併し多くの場合に寫生をするにせよ。寫眞を撮すにせよ。必ず如何にして自然を寫し出そうかとして其着眼點を選び其圖取を撰ばずには出來ないのであらう。是が即ち其大規則である。自然にせよ。美術にせよ。色彩。陰陽等の形式上の大規則が存在して居るのである。

一二三。此大規則の數ある中で第一は變化ある事である。何物に依らず形式的で。又繰返さるゝ時は趣味を失ふものである。譬ば同じく垣根を描くにも完全に作られたるものよりは極粗末な。破れかゝつたものゝ方が面白味がある樣な。新しく建てられた家よりは田舍屋の軒傾き屋根頽れ蔦蘿の匐ひ纏はつて居る方が見る人に滿足を與へるのである。曲り曲

第三十四圖

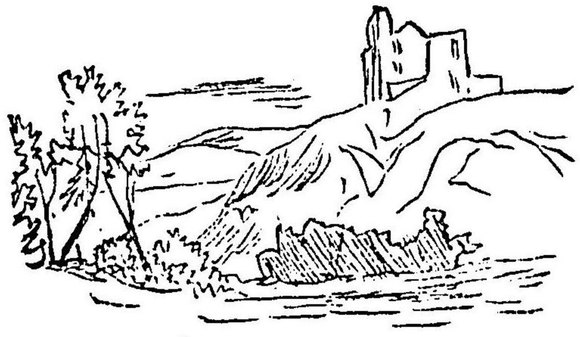


つた山道の方が立派な大道の平坦なのよりは趣味があるのであります。

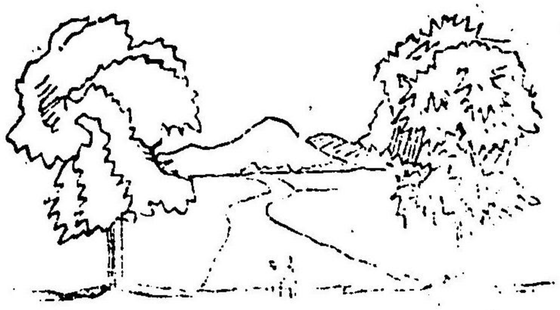
自然に於ては少し位の類似は風景の變化のあるのに依つて取り返へさるゝものであるけれども美術の作品に至つては其自然の一部を撰擇したものである故に極僅の所に類似があつても遂に逃れる道はない。

是最も研究を要する處であるのです。

第三十五圖



第三十六圖



一二四。主要なる物象は決して繪の中央に第三十四圖の如くに置かれてはならぬ。如何しても第三十五圖の如く少しても一方へ片寄せて置く方が最も滿足する寫し方なのである。

一二五。繪の兩側は双方相異せざる可からず。同じ物を重複する事は最も厭ふ可きものである。第三十六圖と第三十七圖とを對照せば最も明瞭に其缺點を知る事が出來るであらう。

第三十七圖

一二六。遠景の描かれたる地平線が再び前景に於て重複せられたのは面

白からず。第三十七圖の如きは是である。

第三十八圖

一二七。點景の人物は三十六圖に於ける如く中央に置れたるは面白くはない。必ず。左右何れかへ移されねばならぬのである。又距りたる小山の頂點の眞下に置れたるが如く直線に相並で高き物象と相重なるのは同じく厭はざる可からざるものである。

一二八。重複は厭ぶ可く。平均を取る事が必要てあると共に第卅八圖に於て見らる。一方が空隙となれるは是又面白からず。第三十九

第三十九圖

圖に示されたる如く少しく離れて少しく小なる樹木を加へて稍見直す事を得たのであらう。

一二九。常に樹木を以つて平均を取る事は必ずしも必要と云ふのではない。時として第四十圖の如く駱駝と人物と以つて遠景との配合を取つて暖く描かれたので平均を保つ事が出來たのである。

一三〇。景色の中で山が一番高いものであつた時には其線を重複させない事が肝心である。假令ば、止むなく夫を重複させる樣な場合があつたならば陰影を付けるとか形を變へるとか何か差異を明にする法を取らねばならぬのである。同じく重複になる可き線でも方向。長短。其他を變へて第四十

第四十圖

一圖の如くにしさえすれば間然する處はないのである。

一三一。第四十一圖の如く險阻なる崖。又は岩の如き物を描く時には角張つた。鋭い線を用ふる樣に注意する事が必要である。曲線や丸味のある線を用ふれば全く繪は出來美を失つて仕舞ふのです。假令ば角線と曲線とは交へて用ふるにしても丸味のある線が多ければ多い丈強味を失つて仕

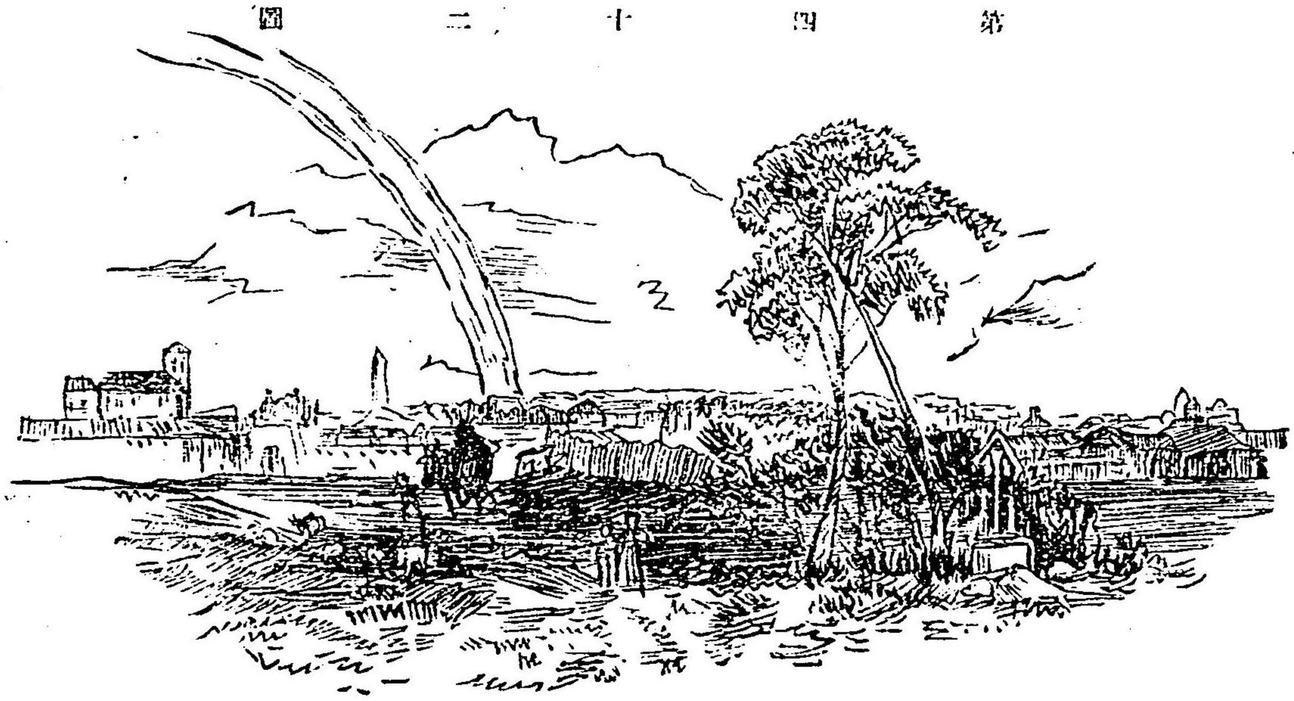
第四十一圖

舞ふのである。

一三二。山を描く時には最初考へ〳〵線を引く事は避く可き事である。三角形でも宜しい。正三角でさへなければ。其一方は必ず。他の一方の角度又は傾斜の度と同じからぬ樣に仕なければならぬのである。若し其一方に凸圓形の線を用ゐて凹形に終る場合には他の一方は凹形にして凸形に終る樣にすると同時に。其凸凹の割合に相違のある物に仕なければならぬ。尙出來得可くんば高低長短に於ても不同があるならば是に增した事はないのである。

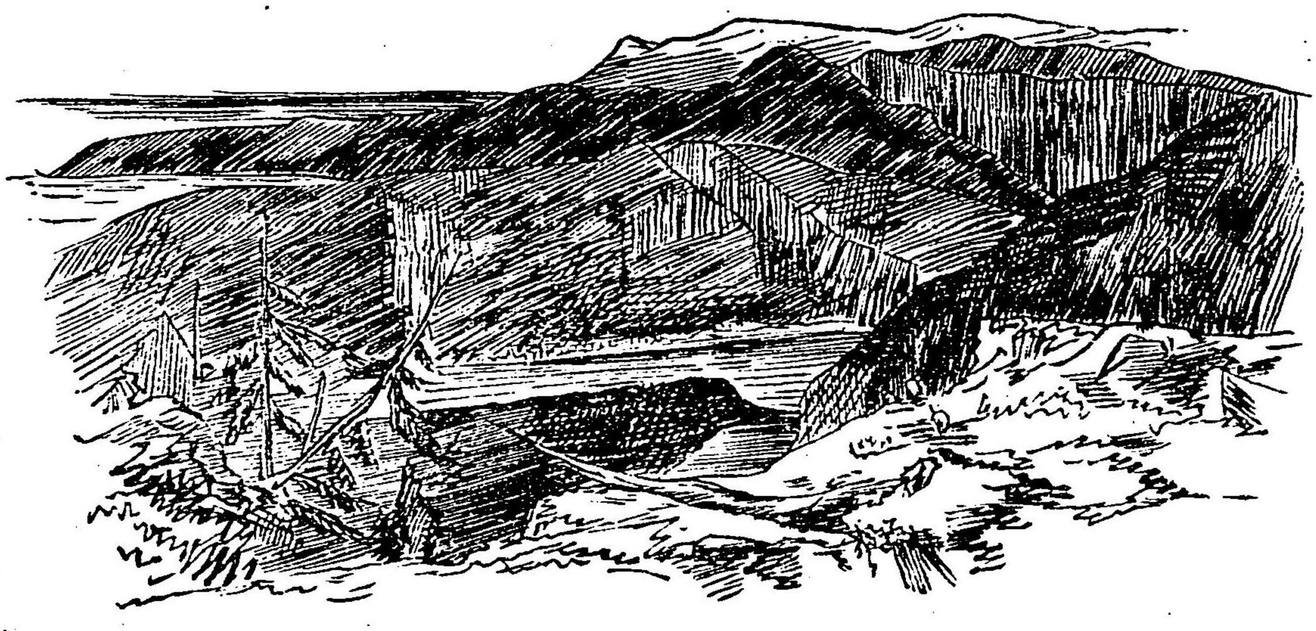
一三三。第四十二圖の如く山が山と相重つて居るのを書き分けんとする時には。先其輪廓を輕く付けて置いて。山の背が前の山と相接觸して居る處には其細い筆を少しく柔げて使へば。全く其山と山との區別を現はす事が出來るのである。若左もなければ山と山の區別は遂に消えて仕舞

第四十二圖



法蘭西生寫

第四十三圖



構造と位置

ふのである。山の間又は谷合などには多くは靄又は霧なぞが立上つて居るので。是を書き現はさうとすれば。其處邊の色を弱め。又筆づかひを荒くして寫し出す事が出來るのである。

一三四。少しく困難な事ではあるが。一般に畫を描く人には地文學の智識が無ければなるまいかと思はれる。何故なれば地質。岩層などの種類。色彩を知るに最も便利であつて。其智識が無ければ見逃し易い。特殊の點をも捉へる事が出來るからである。

一三五。第四十三圖の如く地平線が低い場合には樹木は前景の材料に用ゐられる事が多い。時には此圖の如く幾本をも排列する場合もあるのである。又此前景を賑す爲めに木立の間に空を見せたり。色々の品物を寄せ集めて充分に地平線に對する配合を取る事もあるのである。

一三六。地平線が高い時には此の如くして前景を助ける樣な場合は少な

いのである。先づ樹木は第四十四圖にある如く輕く筆を着けるのが最も穩當な仕方である。此の圖に依れば前景の樹木は茂つて景色の一

第四十四圖

部を封じて仕舞つて何者とも見る事の出來ない樣にしてあるのである。

陰陽の方則

一三七。影と日向とを研究する事は畫を學ぶには最も必要なものである。其寫し出した物躰を鮮明ならしめ。又其主要なる題目を力あらしむる爲めに缺く可からざる方則なのである。

一三八。繪畫に陰陽を描き現はすに精確な規則を定める事は頗る六ヶ敷い事である。で今迄ある大家の作品に依つて見出さるゝ方法を取用ゆるより方法はない。是に依つて工風をしたなら必ず充分でなくとも滿足するに足るの繪畫を作り出す事が出來樣かと思ふのである。

一三九。陰陽は繪畫に取つては全部に通じて最も肝心なものである。例如何なる小なものにせよ。影日向のないものはな

いから。第四十五圖を見れば此繪の陰陽の取り方が大略了解せらるゝであらう。此畫の重なる部分は地平線に近い空で。暗い樹木の茂が其空の色の明るさと配合されて其枝や葉の空に

第四十五圖

近付くに從つて段々に明るくなつて居る處や。空の色も畫の上部になるに從つて少しづゝ色を濃くしてある邊を見ても。大躰の影日向の調子が了解されるのである。其規則は先づ最も暖い處と相並べられて其光線は繪の左の方へ射られて漸次に柔かになり全く一つの調和を得て居るので。畫の精神は遺憾なく發輝されて居るのである。

一四〇。此方法は充分注意して研究されねばならぬのである。右に寄つた樹木の暗い茂みは前景の暗い草叢と流に群つて居る數匹の家畜とに依つて左方の稍明いる處とに巧みに續けられて居るのである。中央の景の暖い茂みに差出て居る樹木を誰人でも注意しない譯には行かないのである。夫は其河柳の葉の色を明るくして後の葉の色の暖いのに對照して樹と葉の間が離れて居て其處へ強い光線の當つて居る事を誰にも分る樣に現はしてあるので巧と云はなければならない處である。

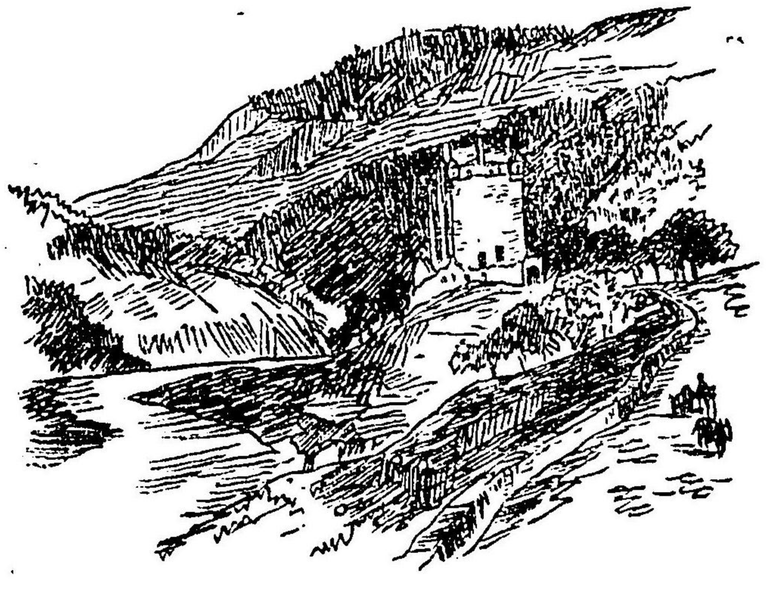
一四一。前景の暗い處に坐つて居る牛飼の姿が是又頗る價値のあるものである。何となれば牛飼の坐つて居る土堤の平凡に過ぎる缺點は補つて余のあるのである。同時に家畜の點々として小川を涉つて居るのも繪に面白味を加へて居るばかりでなく。一躰に繪に力を添へてある事は勿論なのである。

一四二。此實例は如何にして美しき自然を美術の上に用ふ可きかを敎へる立派なものである。此繪の作者クローデは風景畫家として有名な人で。多くは余り簡單過ぎる繪を描くと迄云はれた人であるけれども茲に出した如きは其難の尠いものであらうか。併ながら是の畫に依つて充分研究して見たならば如何にしてクローデが簡單なる自然を描いて最高なる美術とするに苦で同時に發明する處があつたかを稍伺ひ知る事が出來るのである。

一四三。凡て風景畫に於て明るい處が種々の色彩で圍まれて居る場合には他の補助的の明るい處を拵へて却て畫の主要なる中心を妨げられない樣に注意しなければならないのである。第四十六圖(第四十四圖と同場合にして其視點を異にしたるもの)の如き。其主たる明るい處は中央の古城であるのに。水にも又。其後方の樹木と右側の明るい樹木とを結合する爲めに明るみを與へてあるのである。

一四四。第四十四圖では主要なる部分

第四十六圖



は古城の下の暗い茂みを以つて形造られてある。併ながら。水の暗い色と配合される爲めに横に陰影を付けた爲めに主要の點である事を妨害させて、仕舞つたのである。陰影は畫の一方から一方迄に横に是を施せば夫れを切れ〳〵にした時分は畫面に廣さを得られるのである。第四十三圖の光線の如きは此法を用ゐたものである。

一四五。廣さと云ふ事を現はすのは繪の大なるものに適用せられるのは。丁度混雜した處を現はすに陰と陽とを澤山に用ふるのと同じに効力のあるものである。其好き例は第四十五圖に能く現はされて其大なる調子が如何にも自然に合つて居る處にあるのである。茲に記憶す可き事は。繪の廣さと云ふ事は必ずしも繪の平坦と云ふのとは何の關係もない事である。繪は如何に廣くとも大きくとも其間に變化を要する事。平坦であつてはならぬ事は勿論の事である。此四十五圖の如き相應に廣さも大さも

あるに充分方々に變化を現はして居るのを注意仕なければならんのである。左方の樹木の茂みは枝や葉の間から來る光線で巧みに其大なる處を補はれて居り。前景の土堤の廣さは草や家畜を書いたので巧みに平坦なる可きを掩はれてあるのです。同時に陰の鈎合は樹に當つて居る光線で取られて居るのである。

一四六。陰陽の鈎合を取る事は必ずしも是を繰返へしてすると云ふ意味ではないので。此繪に就いて見ても一方は他方よりも非常に強いのである。其他諸處に不平均の處が見受けられるのである。

一四七。凡て重複は厭ふ可きである。畫の調子を調へ。尙其平均を保つ爲めには成る可く多く變化を作る覺悟で著筆せねばならぬ。中位の色合で好い處でも其一部には暗い處も作らなければならないのである。併なから是等でも決して嚴然たる規則であるとする譯には行かず又。規則を

作る譯には行かないのであるから。如何しても畫者の判斷に任せて作られなければならぬのである。

一四八。筆のかひを柔くすると云ふには何を畫くにも必要である。何處でも必要に應じて其色を强める事の出來る樣に筆を着けなければならぬのである。

一四九。筆つかひを堅くする事は畫を平凡に切り離した樣なものにする恐がある。是を直すには或る一部分へ光線を與へるか。又は何處ぞ余り鋭い處を清潔に取り去るより外に方法はないのである。

水彩畫法

一五〇。水彩畫に必要なる器具は畫板と紙又はスケッチブロック(剝取り寫生用紙)繪具と水壺と筆。と是丈けである。

一五一。筆の最も好いのは貂の毛の赤又は鳶色のものが先一等としてあるけれども。一般に用ふるには赤色のが直段も安いし。結搏間に合ふのである。て餘り細い筆を用ひるのは決して好い事ではない。細い筆を用ふれば畫が稍ともすると束縛された樣なゐじけたものが出來るし。又畫は全躰塗ると云ふ樣な場合に非常に不自由な事があるのである。勿論細い處を描くに細い筆は必要ではあるけれども是とても決して細い筆が是非無ければならないと云ふ樣な事は無いのである。

一五二。紙は其描くものに依つて色々あるのが用ゐられるのである。て最も普通に用ひるには強い。水を撥きも吸ひ込みもせぬ。而して好い程に目の荒いものが適當てある。

一五三。紙は最初延ばす爲めに澤山に水を含ました海綿て徐々に濕して。濕ればくる〳〵と卷けるのを其儘に三十分程塵の付かない樣に置いとい

て。充分に濕り且つ柔になつた處で。畫板の上に擴げ。緣張りにするか又は紙躰を膠で貼り付けて仕舞ふのである。

一五四。一層便利な方法は枠と畫板を用ゐる事である。つまり紙の濕れたのを畫板に乘せ其上へ枠を箝めて紙を確り止めるのて市中に澤山賣り品がある筈てある。併しながら此方法の不便なのは畫の大小に依り畫板が枠としつくり合はない樣な時には紙は乾く迄にすつかり縮まりて仕舞つて何の功もない事になる事てある。

一五五。次に繪具は賣物に幾干ても高いのも安いのも適宜の品物があるのてあるけれども風景を畫くに必要なものは先づ左の通りの色を揃へて持つて居なければなるまいと思はれるのてある。

エロー、ヲーカー　Yellow Ochre

ガムボヂ　Gamboge

インデアン、エロー	Indian Yellow
ロー、シーンナ	Raw Sienna
ロー、アンバー	Raw Umber
マツダー、レーキ	Madder Lake
マツダー、ブラオン	Madder Brown
ライト、レッド	Light Red
バーント、シーンナ	Burnt Sienna
バーント、アンバー	Burnt Umber
バンダイキ、ブラオン	Vandyke Brown
コバルト、ブルウ	Cobalt Blue
インデイゴ	Indigo
セピア	Sepia

ランプ、ブラック	Lamp Black
チャイニース、ホワイト	Chinese white

一五六。 初めて水彩畫を學ぶ人は繪の具の色が如何云ふ風に紙に乘るかを最初先づ小さい紙片へ描いて試驗して見るのが必要な事である。

一五七。 水彩畫に用ゐられたる繪の具の内で唯一色で用ゐられるのは二色しか無い。カムボヂとクロームエロー。丈けが純粹の黄色として用ゐられる外は赤でも青でも純粹のものは一つもない。孰れも他の色を混合して用ゐられるのである。假令ばコバルトとフレンチブルウとは双方とも紫に近く多少赤色の分子を含で居る。故に此二色は清い綠色を作るには不適當なものである又一方にインヂコとブルシアンブルウとは綠に近く少しゝの黄色の分子を含有して居るのである。是故に此二色は綠を作るには必要であるが。紫を出すには不適當なのである。

一五八。繪の具の内には透明のものと。半透明のものと。全く不透明のものとがある。假令ばガムボヂは透明で。インデアンエローは半透明。バーミリオン。クロームエローは不透明である。此三種の性質は夫々違つた目的の爲めに各々特殊の必要がある場合が起るのである。

一五九。ガムボヂ。バンダイキプラオン。又はアスフワルタムの如き最も透明性の繪具は前景を畫く場合に非常に必要な事がある。併しながら。其色の強い爲めに遠近の調子を破る事があるので。其他の場合には危險であるけれども。夫も充分に注意して適當な場合にさえ用ゐらるれば左程の心配は要らぬのである。

一六〇。是と反對にエローオーカー。ライトレッド。コバルト。又はフレンチブルウの如き不透明の繪具は遠景を畫くに必ず用ひられねばならぬ色なのである。

一六一。以下順を追つて繪具の各種類の通常の性質を說明すれば。

一六二。エローオーカーは鮮明で。適度の溫みを持つて居るから。畫の凡ての部分に頗る必要なものである。

一六三。ローシーンナは鮮明な。美しい。溫い黃色で。殆ど透明な繪具で。草や。樹の茂みなどを描くには是一色か又は他の色と混和して最多く用ゐられるのである。

一六四。バーントシーンナは前と殆と同樣で稍調子に於て赤色を帶びて居るので。專ら秋の色に用ゐられ。又インヂコと混和して低い調子の必要ある綠色を作るに用ゐられるのである。

一六五。インヂアンエローは美しい。光りのある黃色で。半透明である爲めに他の繪具と混和して頗る有用な色である。例へばランプブラックと混合すれば綠色の暗い色が出來る。ガムボヂの純黃なのを用ゐるのと違

つて殊に暗い處の色を出すのは必要なのである。

一六六。ガムボヂは前景に用ふる清き黄色で粘著質に富む。又他の色と混じた時には深い色を出すに用ゐられるのである。

一六七。カドミウムエローは日の出。夕陽等を描くに用ゐられる。時に高い同じ色に用ゐられる事もあるけれども。夫は繪の仕上つた時に僅に必要な部分に注意して用ゐられねばならぬ。

一六八。ライトレッドは色々の方面に必要な色である。是多くは地の色や。建物の色に用られ。又コバルトかフレンチブルウと混和された時には。美しい灰色が出來て空などの彩色に最も適當なものとするのである。

一六九。インヂアンレッドはライトレッドと殆ど同質のもので稍深い調子と冷い色を持つて居る。時として要用なものである。

一七〇。バーミリオンは單に繪の調子と力を付ける爲めに點せらるゝ人

物其他の物躰に點せられるのみである。用ゐ處に依つてはレーキ又はインヂアンレッドを合して變化させる事も出來るのである。

一七一。レーキは一般に頗る必要である。併ながら永久の色ではないのである。マッダーレーキ。マッダープラオンも遠景には用ゐられるので。非常に清潔で好く現はれるのである。若單純な色を望むならば一色を使ひ。他の色と合せ樣とすれば。他の色を塗つて置いて跡から其上へ用ゐられればよいのである。レーキは最多く遠景に紫色にして用ゐられ。プラオンは中景又は前景に用ゐられるのである。

一七二。コバルト。フレンチブルウも又清い要用な少し紫がゝつた繪具である。多くは空の色に用ゐられ又後景に大氣の作用を現はす時にも用ゐられるのである。

一七三。プルシアンブルウも清潔な。好く洗はれる色であるけれども少

しく強過ぎて通常用ゐ處には適當しない。畫面に冷たさを與へる時には是を用ふるのが最適當であるので。黄色を混和して出來る綠色は最も好もしい光輝のあるものである。併し是を用ふるには多少注意しなければならぬのである。

一七四。インヂゴも亦要用な色で種々の黄色と混和して色々の綠色を作り。又バーント、シーンナと合して大なる必要ある色となるのである。

一七五。エメラルドグリーンはバーミリオンと同じく光りある個處を描くに用ゐられる。併其用ゐ方は大に注意を要するのである。

一七六。ローアムバーは石。地面の色等を寫し出すに必要な。調子の低い黄色である。

一七七。バーントアンバーは前のと殆ど同性質のもので稍赤味を帶びて居るのである。

一七八。セピヤは清い。冷い鳶色で。調子の低い透明な色を出す事が出來る。

一七九。チャイニースホワイトは空氣の働を寫し出すのを助ける爲めに時に用ゐられる外。コバルト。フレンチブルウと合して遠景に用ゐられ。エローオーカア。又はカドミウムと合して建物の高い光線などを現はすに用ゐられる。併ながら成る可くは用ゐない樣にす可きものとしてあるものである。

一八〇。繪は時として油繪の如く不透明の色を用ゐて作られる事もある。是は其目的に依つては頗る面白い方法で。凡て普通の色で出來るのである。始め不透明の色を用ゐる次に半透明色を用ゐ。最後に透明色を以つて描き終るのである。此法に依つて最初用ゐられる繪の具は。チャイニースホワイト。エローオーカー。ローアンバー。バーントアンバー。クロー

ムエロー。オレンヂクローム。バーミリオン。スイトレッド。インヂアンレッド。コバルト。プレンチグルウ。プルシアンブルウ。の如き不透明の色である。

一八一。色の内に三の原色と稱するものがある。即赤と黄と青とで。其他の色は凡て此三の色の種々に混和されて出來たものである。で今吾々が此三色さえ持つて居れば外には何一色入り用のものはないのであるが。不幸にも左樣云ふ譯には行かないのがあるのである。

一八二。原色の一と其他とを合して第二色即ち橙黄色。綠色。紫等が作られる。赤と黄が橙黄色を。黄と青とが綠色を。而して赤と青とが紫色を作り出すのである。

一八三。此三色を總て一つに混和すれば。黑色が造られる。綠に赤を加へても。紫に黄を用ゐても橙黄色に青を加へても。其第二色は消されて

仕舞つて孰れも黑色と異つて仕舞ふのである。

一八四。併ながら若第三に加へられる色の分量が少かつた場合には第二色は其調子を低くされて灰色に近い色を示すに止まるのである。例ば赤を綠色に加へれば其綠色は稍灰色を帶び其加へる分量を殖すと共に全く綠色は失はれて仕舞ふのである。

一八五。次に赤色へ少しの綠色を加へた時には又頗る面白い結果が出來る。其他の色でも同じ事であるが。是等は讀者が實驗せられるに任せて置くのである。

一八六。色の配合は一色と他の色との簡單なる組合せに依つて爲されるのである。例へば赤に青又は黄を。或は灰色又は綠色を或は黑又は白を以てする如く色々の方法がある。併し最も強い配合を得るには綠色を以てするのが第一である何となれば綠は赤以外の原色で成立つて居る。黄

と青とが混和されたものである故に是を赤に混合すれば赤は消されて仕舞ふ程の反對の性を以つて居る色である故である。

一八七。原色が斯の如く相互に相反する性を有すると同時に第二色は完全なる配合を作る事が出來ない。何故となれば其一部には必ず同一の原色を含むて居るからである。例ば橙黃色と綠とは双方とも黃を含み。紫と橙黃色とは赤を。綠と紫とは青を含むて居るからで。夫故に最好き配合を作らんとするには橙黃色と青。紫と黃の如き特殊の原色を以つて對照させるに依つて得られるのである。

一八八。明るい色と暖いのとが。配合の上に非常に影響する事が間々少くないのである。例ば前景の暗き爲色が遠景の薄い青い色と配合される如きものである。併ながら是は色の差よりは明暗の差に深く注意すれば自然に巧みなる配色を得られるものである。

一八九。綠を帶びたる灰色。又は灰色を帶びたる橙黃色の如き。色の光澤のあるのと鈍いのとに依つて又配合の上に少からぬ影響が與へられるので。是らも一通りは研究しなければならないのである。

一九〇。是等の研究の爲めに色を用ゐんとする場合には豫め原色と第二色とに論なく總ての色の弱い強い。明い暗いなどは。充分に試驗して會得して置く事が頗る肝心の事として見られるのである。

一九一。茲に第二色の外に第三色とも云ふ可き色の數種がある。併しそは特殊の色彩を有するものではなく第二色に他の色の加つたもので。即ち綠に。橙黃色とを加へた時の如きて。黃色の分二。青一。赤一の混和されたものである。前にも述べた通り原色の三種を平均に混和すれば黑色を得るのである故に。此の色には黃色が多く含まれた爲めに僅に色を保つ事が出來たのであるけれども極く調子の低いサイトリンと稱する暗

黄色となるのである。同じ方法に依つてラビット。ヲリーブ即ち孰れも調子の極めて低い赤色と青色とを得る事が出來る。併しながら原色の變化は遂に爲し能はぬものである。

一九二。鳶色は黄色又は橙黄色の調子の低いもので。セピア又はローアンバーは黄色の調子の低いので。バーントアンバー。はバンダイキブラオンと同じく調子の低い橙黄色なのである。

一九三。色は凡て温色冷色と二つに分ける事が出來る。赤を含たのが温色と呼ばれ。夫を含まないのが冷色である。黄色は丁度中色であつて。青色は全く冷色と云はるゝのである。

一九四。白も黑も其方の區別をすれば冷色である。故に白又は黑を混和すれば他の色も冷色の度を加へられる事になるのである。

一九五。最も温色なるものは赤で。次は橙黄色。最も低い温色は赤を帶

びたる紫色である。

一九六。最も冷色であるのは青で。綠は其次で。紫は冷色の最も低いものでみる。

一九七。色の調和と云ふ事は種々の色彩の間に自から生ずるものであつて。全躰の色の澤山の集まりの中から混合されて見られ得るものである故に。繪の全躰の力に迄は大なる影響を以つて居るのである。

一九八。調和の最も好ものは畫面の全躰に一色の調子を與へるに依つて得らるゝのである。自然に依つて見らるゝ如くにする事である。例ば夕陽の景の如き大氣中の霧等に同じ色の輕き調子の現はされたるに依つて充分なる調和の取り得るが如きものである。

一九九。水彩畫に於てならば描き初める時に或る一色の繪具を以つて畫面の全躰を塗りて。其後に温き色を段々に加へて行けば始めに塗つた一

色が總ての色を變化せるを以つて容易に調和を得るのである。

二〇〇。水彩畫を始めて當座の間は成る可く唯筆を用ゐる方法即ち筆の働き方筆に力を入れる仕方等を研究する心組が必要である。此目的の爲めにセピヤ畫(セピヤ一色にて他の色を用ゐざるもの)は最も恰好のものである。で成る可くは鉛筆をも餘り多く使はずに輪廓位に止めて置いて。筆の使ひ方に依つて畫面の全躰を納まりの付く樣にするのが最も利益ある方法である。

二〇一。一般の通則として輕るい色は始めの內に用ゐられ其上を重い色を以つて彩られる樣にし。上へ上へと重い色を使つて行くのが過りなき順序としてあるのである。繪の緣は成る可く手奇麗に整然と仕度いものて。不器用に筆つかいの汚いのが現はれて居る樣なのは避けなければならんのてある。

二〇二。平なる面を畫かうとするには。一筆ですうつと彩らなければならず。凹凸のあり又は粗い物躰を描くには筆を切れ〳〵に用ひるか又は點を打つて色を現はすのが宜しいのである。例ば森の茂み又は影の葉などを畫くには鉛筆畫で同じものを畫くと同樣に筆を以つても細かく描かねばならぬ。粗い壁とか。崩れかゝた土堤等を畫く場合には乾き加減に繪具を付けて紙の表面に少し速い位の筆つかひで摺り付けるのが最も適當で又最も仕易い方法てある。

二〇三。卷雲の如き明るい雲は同じ方法で極僅な繪具を筆に含ませて輕くそして速く描けば容易に面白いものが出來るのである。

二〇四。始め白く拔いて置く事の出來なかつた處に光線を明るく付ける必要があつた時には。繪が出事上つた後に筆へ充分水を含ませて置いて。必要な丈へ筆を加へ其の部分の色が水で薄められる迄筆を止めて置けば

結構出來上るであらう。夫で其濕氣は吸取紙で抑へて巧みに他へ水分の擴からぬ樣に拭ひ去る事が出來るのである。是で若し充分に光線を白く拔く事が出來なかつた時には食麵包の片で徐に擦すれば充分に繪の具は取り去られ思ひ通りのものが出來るのであらう左樣に強い光線でなくとも拔く必要があつた時には清い手巾でそろ〳〵擦つても宜しい。が若し護謨で繪の具を消さうとする時には能く〳〵其護謨が清潔であるのを吟味しなければならないのである。

二〇五。場合に依ると或一ケ所の色が其周圍の色と比較して餘り強過ぎて調和の取れない事がある。此場合には矢張り前の樣に少し加減して水氣を少く含ませ。食麵包の片で徐かに擦すれば適宜に色を薄らげる事が出來るのである。是を吸取紙で拭ふて。

二〇六。繪の具を下す事は始め薄い色を描き漸次に暗い色を用ゐ最後に

最も暗い色を加へる、のが順序である。是事は如何なる場合に於ても殆ど總ての畫の上に必要なる事實である。草叢。樹の茂みを畫かんとする時は。一般に通じた色を最初先づ用ゐて。漸次に濃い色に移り最後に暗い陰影を着けるのが至當なる手段である。若最初暗い部分へ筆を着けたならば畫の全部は爲めに打潰されて仕舞ふであらう。其上繪の力と云ふものは全く損はれて仕舞ふのである。

二〇七。彩色の內で或特殊なる物躰を寫す爲めに極立つて異ふ調合の仕方をする場合がある。是には定まつた詳しい規則はなく畫家が各自の考へて銘〻勝手にやつて居るのである。

二〇八。寫生する事に就て。自然の色を見分ける事の上手下手がある事は人に依つて各々差がある事で。水の葉の綠色である事は何人も違はず見る事が出來るけれども夫は何の色で寫せば完全であるかは。全く其人

の眼と頭の働に依るのである。今二つの異つた樹木の葉色を比較したならば一つ一つ必ず特種な調子を以つて居るものであると云ふ事が瞭然とするであらう。或るものは灰色を帶びて居る。○或ものは冷色で他のものは熱色を帶びて居ると云ふ風に千態萬狀同じ只一つの綠の内に何種類あるかも分らず。見分けの付き難い程は殆數限りはないのである。

二〇九。同じ樹木でも影になつた處の色は。明るい光線を受けて居る處とは必ず差のある筈のもので。畢竟主に空氣の反射を受ける受けないで。違が出來て來るものである。清らかな天氣の時には影になつて居る處を。日光を直接に受けて居る處と比較したならば非常に青味を帶びて居る事が見受けられるであらう。雜草雜木も是と同樣で。小山の景色に於て最も注意を牽かれ得るのである。其影の處は日の光に照らされて居る處よりは非常に鈍い而して冷い色を持つて居るのが知られ得るのである。

二一〇。同じく樹の葉の綠は寫すにも。光を直接に受けて居る時と。何物かを透して照らされて居るのとは又甚しき區別があるのである。前の場合には其綠色が稍、黃色に傾いて居ると透明である事が認められ。次の場合には前と。比較して鈍く而して冷い色を現はして居る事が知らるゝのである。

二一一。一本の樹の葉が同じく直接の光線を受けて居るにせよ。其在所に依ては。又非常の差のある事を注意せねばならぬ。

二一二。一般の規則として。日光が前面から來る時には。光線は繪畫の凡ての部分を貫いて輝くのである。併此の場合は主に景色が目と太陽との間にある時に起るのである。此法で草原を眺めて見れば前景に畫者の目と太陽の間に置れた部分は透明で黃色を帶びた綠色を示し。其右と左とは漸次に遠ざかるに從つて冷い色を帶びて行くのである。

二一三。色の調合變化は其場で見た時の必要に應じて色々にされるのであるが。最も注意して自然を觀たる儘の色を作り出したいのである。地の色は鳶色で其上をバンダイキブラオンを添へられるものとばかり思惟しては非常な間違が起る事であらう。空も決して青色で。其上にコバルトを塗られたので滿足してはならぬ。古い交叉した道の色等も此研究には非常の効力ある者で。空の色は常に着色の具合に異動あるのです綠色を喜ぶ事もあれば。又時には全くの青色である事も尠くはないのである。

二一四。空氣が其力に依つて凡ての物體の固有の色に變化を與へる事は最深く注意せねばならず。又透視畫の規則にも充分關係を有するのである。手近くある樹よりは甘間隔つて居る樹の方が如何しても冷い色を多く含有させなければならんのです。遠ざかれば遠ざかる程に目と其樹木との間に横たはる空氣の色の冷さが加へられて。時として非常の距離の

爲めに全くの青色に仕なければ納らない樣な場合もある。

二一五。併ながら青は必ずしも常に遠方の距離を現はす事の出來るものと云ふ譯にも行かぬのである。夕陽の如き水氣の多い天氣には調子の低い黃色か又は赤色を以つて遠景が現はされ。又其色の混和に依つて適當の距離も作り出す事が出來るのである。

二一六。空に水分即ち露霧等の多い處を寫そうとしては屢々過失が繰返へされるのである多くは溫い色を入れ。其風景をして爲めに全く見當違ひのものとして仕舞ふのである。でつまり空氣の畫き方に依つて其風景は左右され得る程に其色取り描き方は肝要なものとしてある。

二一七。繪の具を漸次に上へ上へと塗つて行く場合には下の繪の具の乾くのを待たなければならないのである。左なくば繪の具は相互に混合して仕舞つて不規則な汚いものが出來て仕舞ふのである。

二一八。寫生をするには最も手早く敏捷に筆を下して仕上げて仕舞ふ事を要するのである。何故なれば自然の有物は非常に早く移り變るものであるから。其一つの景色を寫し終るには最も大なる速度を以つて爲さなければ出來難いものであるからである。其筆を下すには鋭く。而して奇麗にする事を要す。其鋭い處は後から段々に筆を加へて行く事に依つて厭ても柔かにせらるゝからである。此樣に仕て行つたなら。如何にか手早く自然を寫し取る事が出來易いかと思はれるのである。

二一九。彩色に變化を加へる事は頗る畫者の心配となる事である。面白味がなければならず。實際てなければならず。自然てなければならず。又平凡てはならず。單調てはならないのである故に。赤と黃は綠色と混和する事が出來る。灰色も蔕色も必要ならば出來ない事てもないのてある。凡て法に合ふと云ふ事。出來得ると云ふ事の眞實を指すのである。

自然を眺めて其中の變化を注意して見れば。如何に吾々は多くの微妙なる色の變化を見落して居るかに驚かざるを得ないのである。

二二〇。急ぐ事なく繪の仕上げを爲す事に就ては。若し高い調子て透明なものを得樣とするならは色々異つた方法がある。最初紙に溫色即ちオーカー。バントシーナ。の如きものを全體に塗つて下地とし。夫れて先づ思ふ樣の溫味と強さとを作つて置く。其上へ尙必要の色があれば紙の乾かない內に此上へ極必要の部分丈加へ。餘分の繪の具は大きい筆へ水を含ませて落して仕舞へば下の繪の具には何の障りもなく立派に思ひ通りの色が乾くのを待たずとも混和され得るのである。

二二一。畫面の各の色を隙なく連續させて用ゐ樣とするには前に印した空氣を畫く法の如く水を以つて洗ふ事に依るのが第一であろう。是には色を清潔に使ふ事と。一番最後に洗ふ時に繪具が攪き亂されない樣に注

意する事が必要なのである。

二二二。此法を實行せんとするには。繪の具は自然の有る處には。少し濃過ぎる位にして用ゐ。後から洗ふ時に適當の色になる迄拭ひ去るのが好いのである。

二二三。畫面を洗ふのに柔かな海綿が時には用ゐられるのである。併ながら如何に柔くとも海綿では空の色か。遠景よりしか用ゐてはならんのである。

二二四。色を薄くする爲めには前にセピア畫の處で云つた通り食麭包を用ひても宜いのである。

二二五。前景の細い處を描き現はさんには。都合に依つては畫の具の未だ乾き切らない内に小刀の尖で以つて削り落しても宜いのである。是れは全く乾き切つた時でも出來るのである。例へば出來上つて仕舞つてか

ら強い光線を白く拔き度いとか純白の花を拔き度いとか云ふ時に最も適切に効用をなすものである。

二二六。洋刀を用ゐて繪の具を削り落す事は。潮流の逆しつて居る處。水沫。浪の穂。火花等の如きものを畫く時に必ず肝要のものとなるのである。

透視畫法

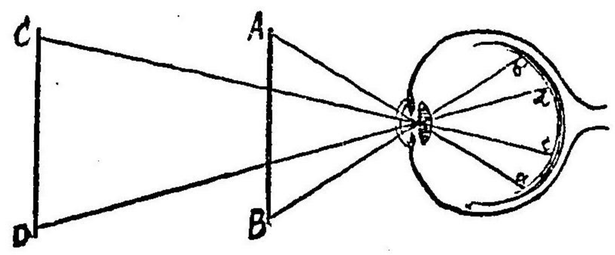
二二七。透視畫法は眼に映る樣々の物躰を平なる面(紙の如き)に過りなく寫し出さんとする術である。是は畫學の基礎であつて。目をして漸次に過りなく自然を透視して平面の物に寫し出す事の出來る樣にする下拵へである。

二二八。自然の物躰が透視畫法に依つて見られたる時には直に畫中の材

料となつたのである。畫を描かんとするには最初先此法に依つて自然の物象を視然る後種々なる形式を以つて是を寫し出すのである此故に先づ透視畫の規則を略述するのは初めて畫を學ぶ人の爲めには尠からぬ必要があると思ふのである。

二二九。 或物躰が吾人の目から遠ざかる時は遂に見えざるに至る事は誰人も知る處であらう。市街を歩み行く人が遠くなれば遠くなる程次第に少さく見え。數十町相距るに至れば唯一の點となつて仕舞ふのである。風景の内の樹木の如きも近付けば甚だ大なるものであつても遠く距てゝ是を見れば實に小なるものとなるのである。是理由は下の圖に依つて說明せらるゝであらう。

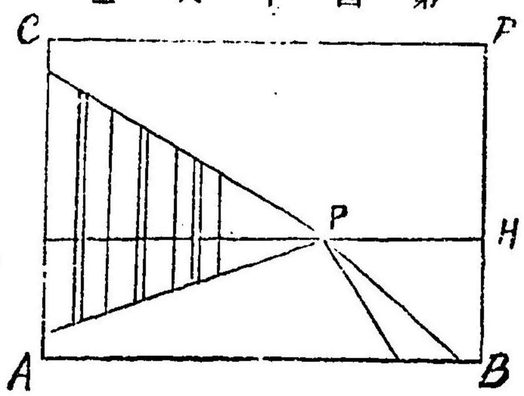
第四十七圖



AB、CD、の二つは眼から異つたる距離にある物躰のつもりである。水晶體を透して網膜に線が引かれて其處に寫す物躰の大さが記されてある。乃ちcdはCD、abはABであつて。同じ大さのAB、CDが其距離の差に依つて網膜に映つたのは半分程も大小の差のある事が知られるのである。

二三〇。 ABから眼に入る光線はCDのものよりも傾斜が強い。それてCDより大きい角を網膜に映し出した事も分るのである。で若しこの距離が尙遠いのであるなら。其光線の傾斜は增々鈍くなる。益小さくするのである。今市街の中に立つて眞直に眺むれば軒並の家屋

第四十八圖

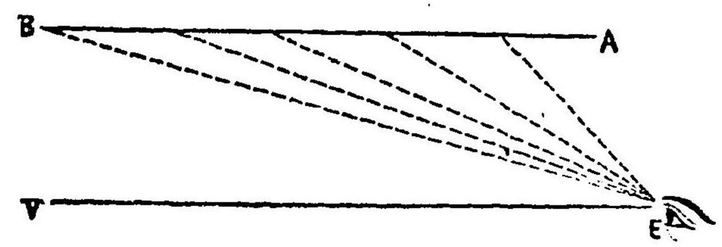


の地平線と云ふものが直に自分の眼に映るものである。其に注意して見ると建物其他家屋の土臺の線は必ず第四十八圖のAP、BPの如くに上へ向ひ。窓戸、煙筒の如きは必ずCPの如く下へ向つて居るのである。で一般の規則は水平線と地平線も透視畫法の所謂地平線に向つて集合するのである。

二三一。茲に自然に起る可き疑問は何故に總の線が一點に傾き又集合するやと云ふのである。其理由は次の圖に依つて十分理解をる事が出來るであらうと思はれるのである。

Eから見て居る人の眼の位置をして。ABを家の軒並と假定すれば。BからA迄の間の點線はEの目に達する傾

第四十九圖

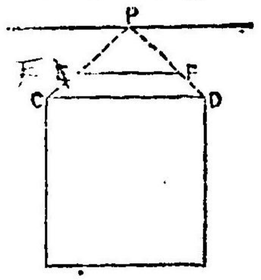


斜の度が次第々に鈍くなつて來のが。知られるのである。若Bの線を何處までも延長するならば遂には點線はEVの線と並行する處まで達するのである。夫故にABから來る所の線即光線は如何程延長されるとしてもEV、ABの線の間の外には出ない。EVの線と並行する處までしか目には入らないのである。

二三二。建物の屋根の如き傾斜あるものでも同じく其線は目に集合して來るのである。で是を描寫せんとする時には如何なる具合に集合するかを注意する事が必要であるので。畫者は是に注意して夫等を全く並行して畫かねばならないのである。假令夫は一見して並行して居ない樣でも實際並行して居るものであるから。

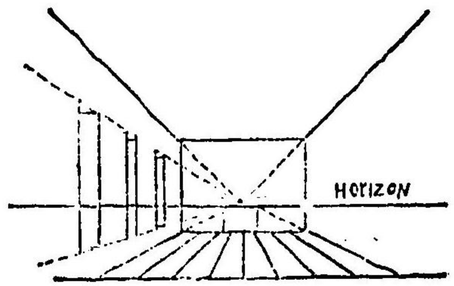
二三三。書籍。箱の如き正角なるものが机の上に置れて

第五十圖

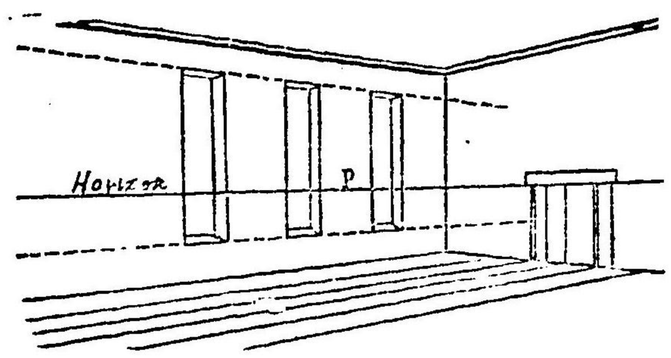


あつて其兩邊が觀る人の位置に對して並行して居るとすれば第五十圖の如くCF、DFからPに達する線の樣に反對の側に直線に集合されて居るものであるに注意しなければならないのです。是を並行線の透視法と云ふのである。今此の並行線の透視法を最も能く理解仕樣とするには四角な室の一方の壁を脊にして立ち。反對の壁の方を見るのが最簡畧な方法であるのです。壁床。窓。天井の線が直線に走つて目と反對の一點

第五十一圖



第五十二圖



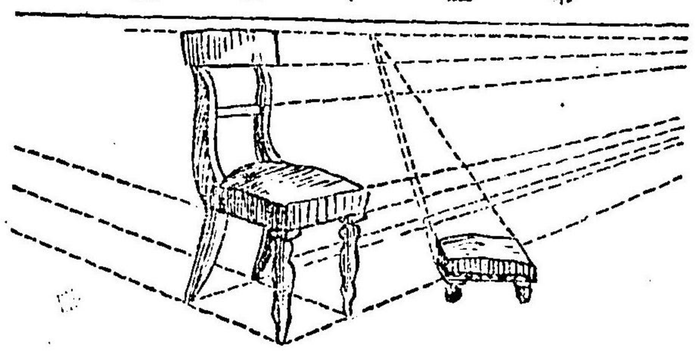
に集合する事第五十一圖に示す如くである。

二三四。併ながら室の一隅に立つて見る時には線は前の樣に目と反對の所に集合する事は出來ないのである。併ながら此場合には其位置から右或は左の地平線に向つて各線は集合するのである。見る人に遠き方へ向つて傾斜する事第五十二圖の如くである。是を角線透視法と云ふ。

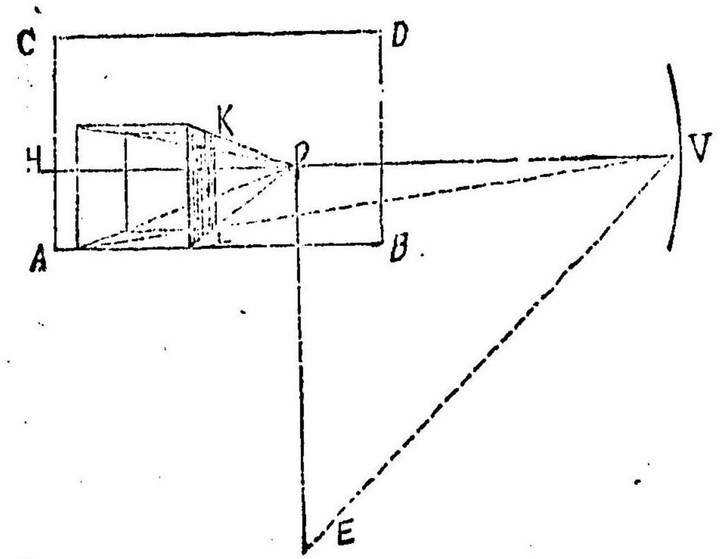
二三五。第五十三圖に示したのは並行透視法と角線透視法の少しく復雜なるものである。

二三六。併ながら是丈では未だ透視法を充分了解したと云ふ事が出來ない。他の色々の實際上の研究を經なければならないのである。故に諸君は何か箱書

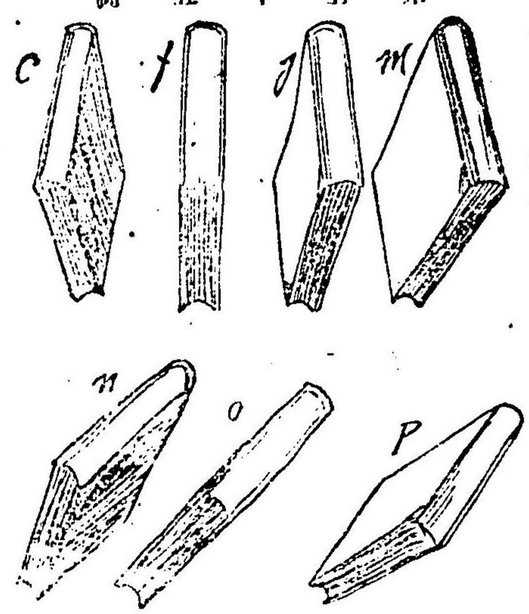
第五十三圖



第五十四圖



第五十五圖

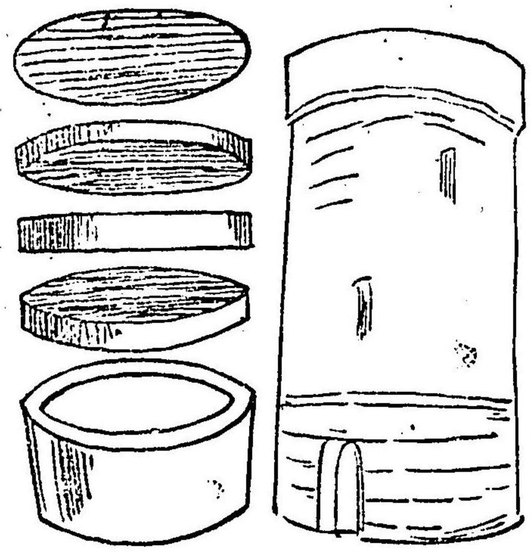


箱等の如き品物を色々の方をして見て其並行線又は角線が如何なる工合に集合點を形造るかを研究して見ることが必要である。例へば今書物の春を前にして見る人の目

と全く並行に置かれたならば第五十四圖のdの如く只脊丈を見る事が出來るのである。併若是を少しく右の方へ動したならば一方の緑がCの如く少しく見える樣になる。是を目より少し高く上げればdはAの樣にCはBの樣になり。若下げればG、Hの樣になり。尙最一段下げればK、やLの樣になるのである。一方の角を立てゝ置けば第五十五圖のC、F、I、Mの如く。夫を又斜に置けばN、O、Dの如くに見えるのである。

二三七。 圓形のものは透視法に依れば楕圓形に見える。輪の樣な圓い物が目と並行した水平線に置いた時には眞直な線の

第五十六圖



み見る事が出來。是を上げ又は下げた時に始めて楕圓形に現はれる事第五十六圖の如くである。

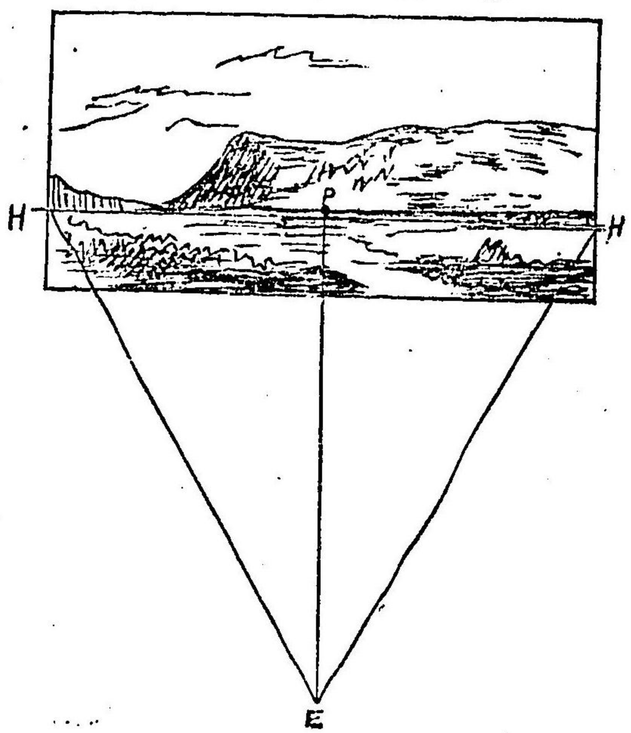
二三八。透視法に依つて見たる物象と透視畫法との關係は薄く燻したる硝子板を垂直に置いて或物躰を移し見る事に依つて容易く了解せらるゝのである。其表に寫る輪廓を撿寫して完全なる透視畫を作る事が出來るのである。併ながら其硝子が目と或角度を爲して置れゝば畫は歪だもので。假令並行に置れたにしても前后に夫が傾いて居だならば同じく完全なるものは見る事が出來ないのである。目に寫る其物の本來の位置の通りに置かれたならば目丈けで見るよりは一層正確なものが見られるのである。

二三九。而して凡ての畫學に關し正確に物象を見得る處は唯一點にある丈けで。是を寫して注視點又は着眼點と云ふものである即ち其點から繪

畫が造られ。又其點から其繪畫が見られ可きものである。

二四〇。透視畫法に於て着眼點を得るには次の方に依らねばならぬ。繪畫から或一定の距離を保つて見る可き事。即ち其畫の定められた水平線の長さ乃ち其畫の廣さの一倍以上一倍半位の距離を離れて注視す可き事。目に反對する處に第五十七圖の如く點を打ち是より前述の距離と同じき長さの垂直線P、Eを引く事。Eは繪の平面に移さる

第五十七圖



る處の着眼點乃ち目である。

二四一。一般の通則としてH、Eの如く繪畫の水平線より來る線が着眼點に集合して造り出された三角形は繪畫に於て水平線の有する度の數と同樣でなければならぬのである。水平線は三百六十度に分たれ畫には其の六十度即ち六分の一は見られ得可き長さとして含まるゝ定めである。故にHEの線即ち水平線から着眼點に達する角度は又同數の度を保つ事が必要としてあるのである。

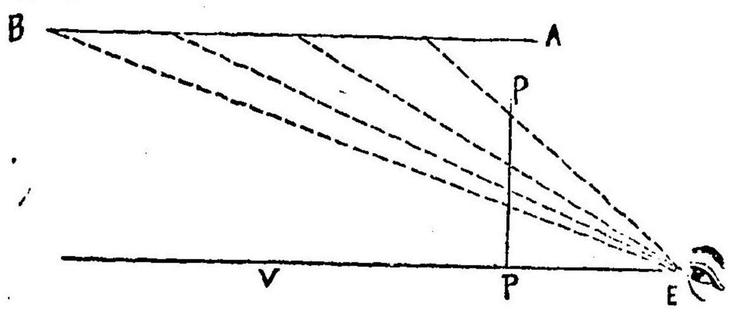
二四二。Pの點は過たる着眼の點である。昔は是を中心點と名付けた。何とすれば目は其着目の點を大抵緣の中心に置いたからである。然しながら是は必ずしも繪畫の中心として絕對的に定められ得可き點ではない。故に現時の畫家は是を主要點と名付けて居るのである。

二四三。其點の時に依つて地平線の上又は下に移される事がある。五十

七圖の如きは下に置かれたので。其選擇は都合の善惡と其繪畫の性質に依つて取捨されるのである。

二四四。第四十九圖には如何にして物象の光線が直眼點に集るかを示し。今第五十八圖には其線は如何にして是を繪畫に寫し出す可きやを示したのである。其A Bは前の如く家の軒並ひの如き物體の線を示しEは目で。P、Pは繪畫の平面を示すのである。夫はA Bの示す通りを現はし。若夫が限り無く延長される時には E、V、と並行する處迄は寫し出され夫を過ぎれば見えず。寫されざるものとするものである。其故にA Bの延長がEVと並行してPに於て混同する時に其線は消滅されるので。透視畫法の規則に——直線の消滅は

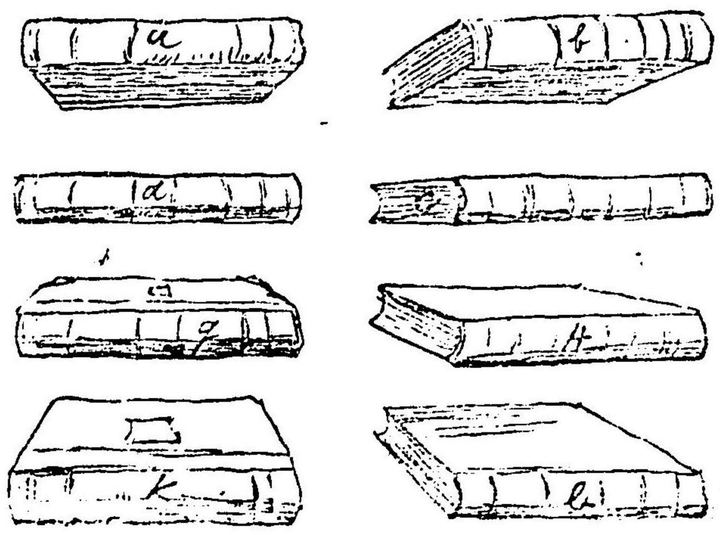
第五十八圖



其線が着眼點を透して過ぐる處の並行線に混交する處なり――と云ふのに相當する事とする。例ば地平線の一部が繪に寫し出さる線れた他の並行線と混同されたる時も消滅さるのである。

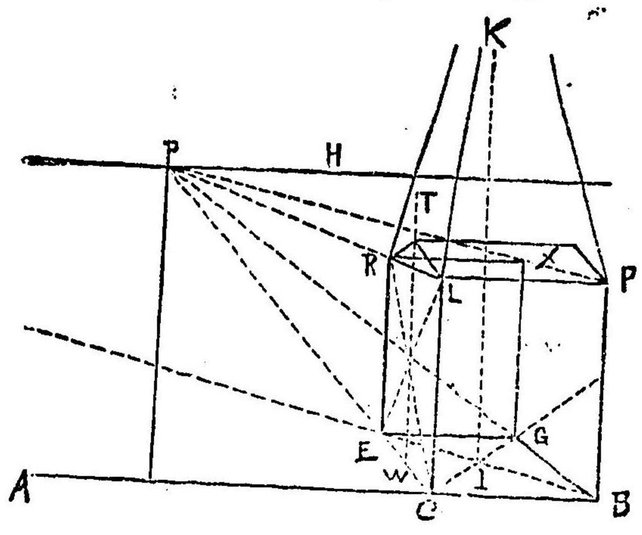
二四五。斯の如くにして第五十九圖のACBDの畫に於て。Pは目に反對の主要點て。並行透視法に依つて一つの立方躰を造るとすれば。先づ正方形を畫き主要點Pに迄水平線を引く。今若長方形の或一邊の端から四十五度の角を以つて線を描くとせば。同じ割合を以て他の一端は切斷せられざる可

第五十九圖



からず。斯くしてEよりEVは作られ。PVはDEと同角度を得るに至る。今PEはPRに於て消滅する凡ての線と並行てある。如何となればFPを以つて蝶番として開かれたる如く繪に於て移されたる想像なればなり。今次に要する處は何ぞや。方形の一邊から引延ばした線がPに於て消滅する其線迄。四十五度の角を以つて傾斜するPE線の透視法に依つて消滅する點を求むるにある。EV線即ち眼又は視線がPより四十五度の角度を以つて作られたるEを導いて地平線に至らしめ消滅點Vを造るのである。

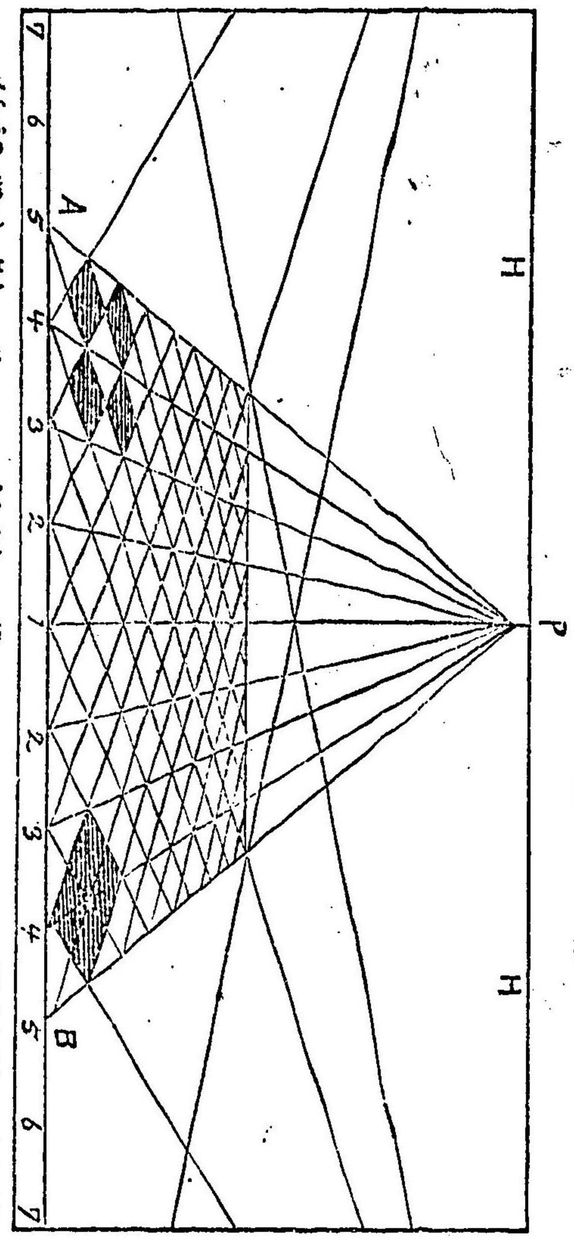
第六十圖



二四六。 第六十圖は透視畫法に依つて建物に屋根を設定する爲め家を兩分せんとする處の圖である。其は頗る簡單な方法でFLとRCの對角線を作つて此邊の中心を得鉛直線WTを得るのである。

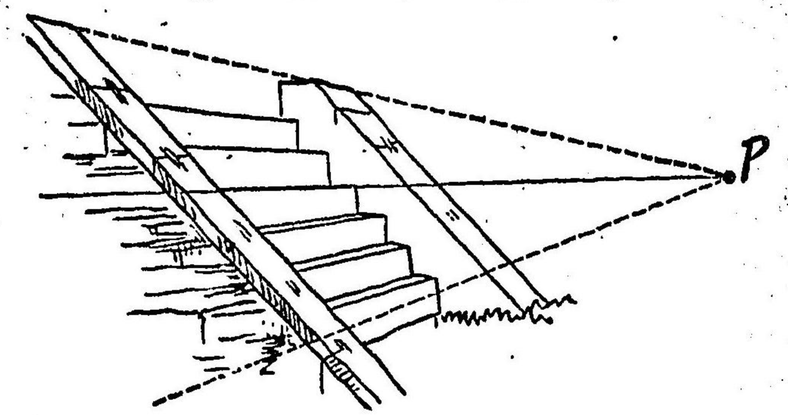
二四七。 又は土臺を元としてFB、CGの二線に依つてIを得IK線を引く、事に依つても目的は達せられるのである。此法は寺院の塔等を畫くに用ゐらるゝ有用なる方であつて時に種々の場合に實際の中心が何處にあるやを知らんとするに必要なる手段である。

二四八。 透視畫法に依つて六十一圖に示すが如き市松形の敷石道を畫かんとするには敷石道の幅ABを畫き是を圖の如く區分し。其中央にABと直角をなす一線を畫き。十三圖の如くして消滅點Pを得。是にA又はBより線を引き。又此PよりしてAB線の各區分に向つて線を引き市松を作る事が出來るのである。

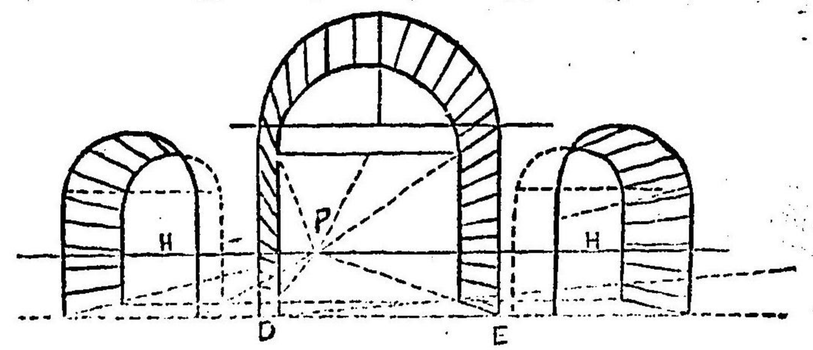


二四九。 並行透視法に依つて階段を畫かんとすれば。其階段の傾斜の度に依つてAB線を畫き。是を各段階の數に分ち其高さと幅を畫き然る後。

第六十二圖



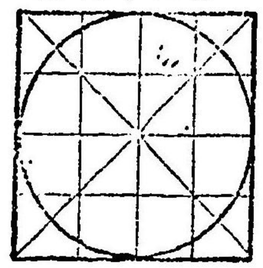
第六十三圖



圖の如くして消滅點Pを得て是を作るのである。

二五〇。 並行透視法に依つて弓形の門を畫かんとせば最初前面の輪廓を畫き。DF線より第五十九圖の方に依つてPを得るのである。

第六十四圖

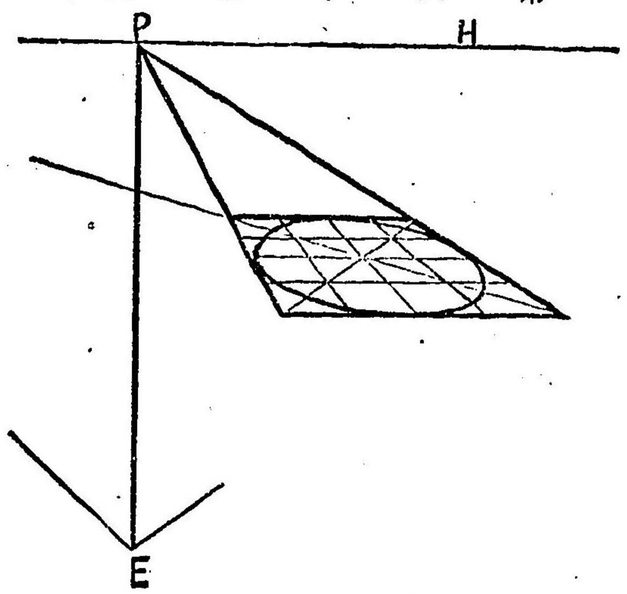


二五一。 透視畫法に依つて圓を描くには正方形を畫き

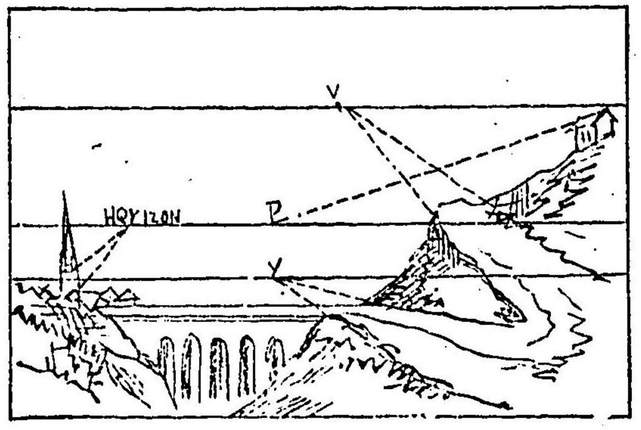
第六十四圖の如く是を若干の數に區分し是に圓形を畫き第六十五圖の如くして方形を透視法に依つて畫きたるものに同數の區分をなし第六十四圖に於けると同じ所に印を附けて容易に圓形を畫き得るのである此法は壁畫等に於ける圓形を寫すに用ゐられ得るものである。

二五二。 透視法に依つて傾斜の面を畫かんとするには。其傾斜を有する面の消滅點を發見するに依つて作らるゝのである。其消滅點は地平線の上下に起るものであつて第六十七圖に對して第六十六圖が示し

第六十五圖



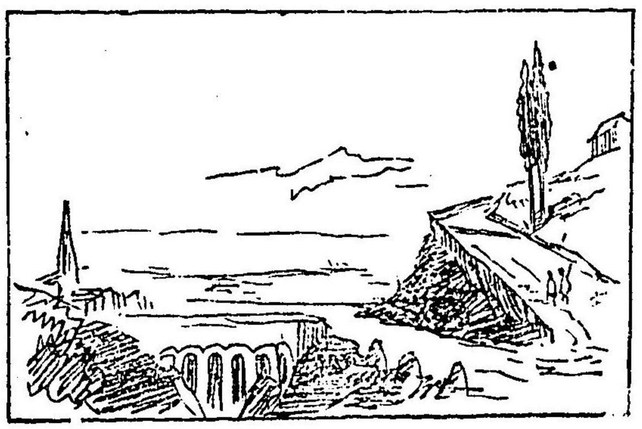
第六十六圖



したるものゝ如くである。即ち地平線は平地の消滅點であつて。傾斜を有する面は各別ごとの消滅點を有するのである。

二五三。或る特殊の傾斜ある面に就ての直し方理想を與へる爲めには地平線が特に有する線を夫の特殊の物躰に近けて注意する事である。

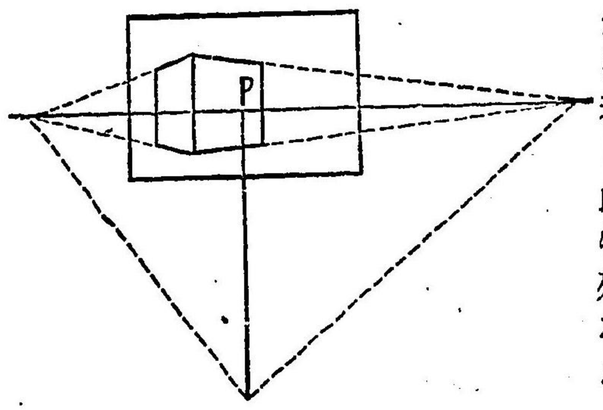
第六十七圖



る。此試驗の爲めには家屋の屋根が好材料である。夫は若し此特殊なる方法を認むるに非ざれば其傾斜の度が何であるかを了解する事が出來なくなるので明瞭ではあるまいか。

二五四。直角透視法に依る場所にある物躰の消滅點を見出すには。其主なる物躰のある處から。着目點を通して線を引く事が必要である。

第六十八圖



二五五。斯くして第六十八圖の示す如くEVの線が引かれ。消滅點は直に見出し得らるゝのである。

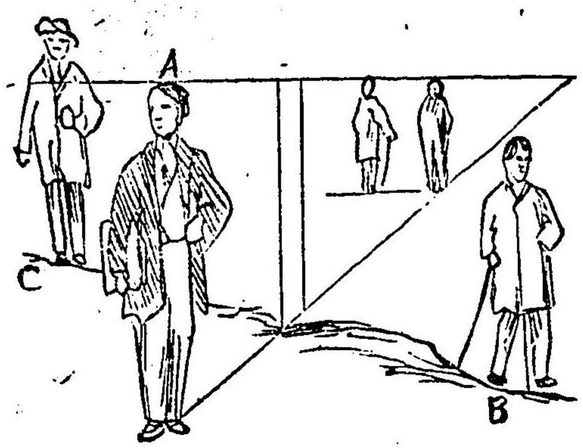
二五六。此方法に依つて三角形。三角形其他の物躰が透視法に依つて畫

かれ得るのである。併ながら唯一つ必要であるのは人物が不規則に混雜して居る時に。是は必要なる場所に幾何學的に描かんとする事である。先づ着目點を透じて是を消滅點に迄で延すのである。

二五七。是法は第五十八圖に依つて示された方法の適用である。

二五八。透視法に依つて風景に人物を點ずるには最初一人は第六十九圖のAの如く畫き頭と足との二線を地平線に向つて引き。是に依つて距離と人物の大さとの比例を知る事が出來。高地にあるCをも。位地にあるBをも其高低に比例して畫き得るのである。

第六十九圖



二五九。前述の事柄は全く透視畫法を說明したと云ふ譯には行かないのであるが。是丈て初學者の研究には充分てあらうかとも思はれるのて茲に筆を止めるのてある。

鉛筆水彩畫

寫生畫法 終

不許複製

明治三十六年八月八日印刷
明治三十六年八月十一日發行

著者　大槻鹿輔
著者　落合浪雄
發行者　東京市京橋區銀座二丁目九　服部國太郎
印刷者　京橋區西紺屋町廿六七番地　石川金太郎
發行所　京橋區西紺屋町廿六七番地　株式會社　秀英舍
賣捌所　東京市京橋區銀座二丁目　服部書店
東京市日本橋區通一丁目　大倉書店

96
305

069939-000-1

96-305

写生画法

大槻 鹿輔

落合 浪雄／著

M36

CEC-0798

93
305